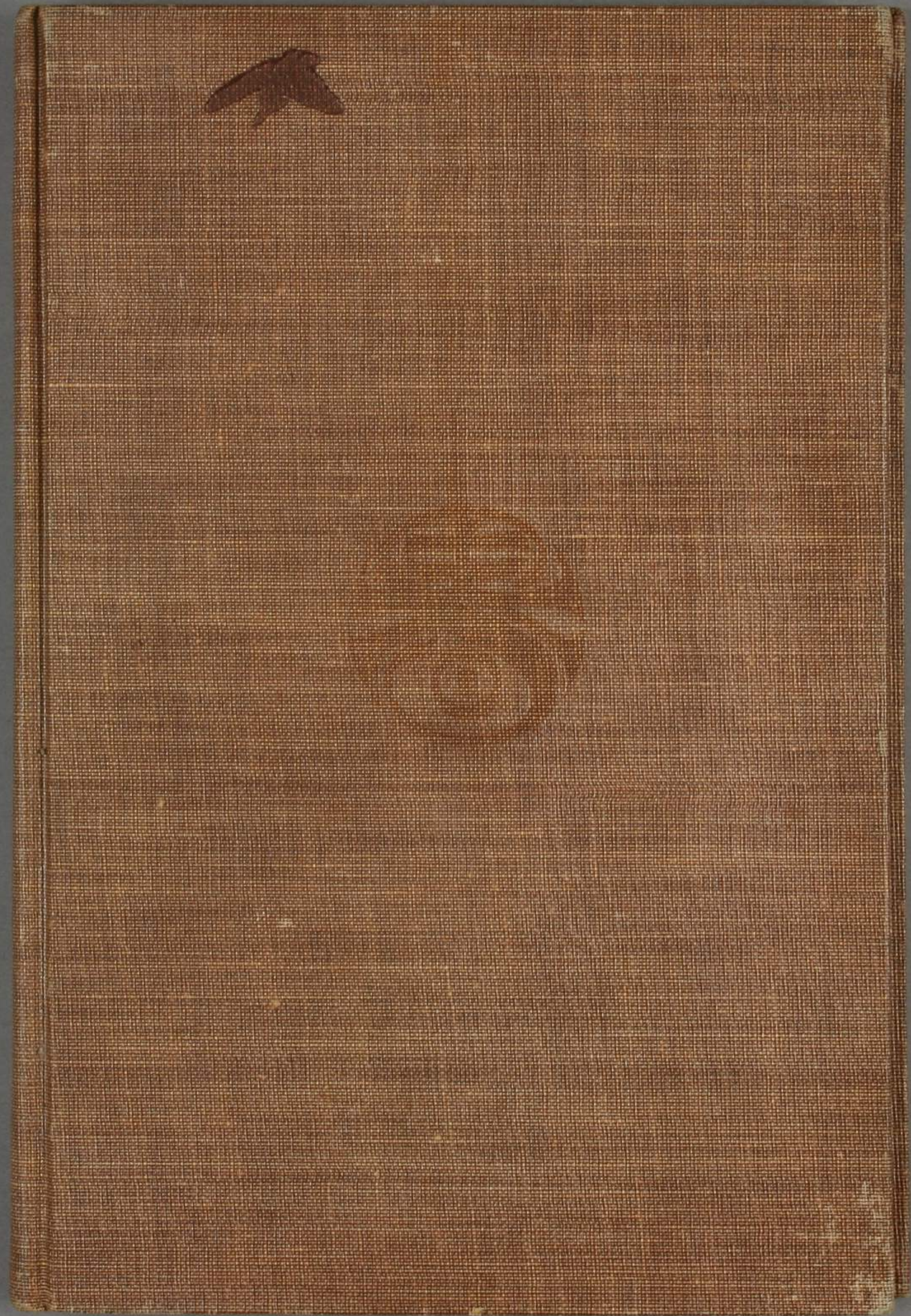




出  
廬  
抄  
註

神  
谷  
鶴  
伴  
著











序

露伴先生の出廬の世に出づるや、予も亦日夕愛誦して卷を捨てざりき。たゞ憾むらくは時に字句の解し得ざるものありて、庖丁解牛の快ある能はざるを。因つて惟ふ、世の愛讀者にして余と此憾みを同うするもの蓋し亦尠からざるべしと。此に於てこれが抄註を作りて我が修學の資となし、旁ら世人の参考に便せんことを圖り、即ち抄註に筆を執り、我が力を竭して諸書を涉獵し、群籍を搜索し、語は其の源に溯り、義は其の秘を闡き、必らずこれが正解を得んことを期し、猶且解し得ざるものある時は、まのあたり先生に就きて疑を質し、教を乞ひ、苟も妄斷臆測せず、專念一意大過なからんことを庶幾し、數十日にして漸く稿を脱するを得たり。然りと雖も予素淺學陋才、自ら欺かざることは有之、自ら過ることはこれ無き能はず、大に粗にして小に詳かに、本を忘れて末に勞し、解の宜しきを得ざるも亦蓋し多々ならん。此等は諸友と江湖諸君との指示を得て、必らず再版の期を俟つて改めんと欲する也。





# 出廬抄註



神谷鶴伴

## 第壹編

### 第壹章 一頁

#### 第一節 一頁

〔みなもと〕 川水の流れ出づる所の義。  
意 先づ川の美しくしく流るゝ状を説きたるまでにて他の意なし。

#### 第二節 一頁

〔しだりて〕 枝の下に垂るゝ義。——柳、  
——櫻、(萬葉集十ノ十三) 春さればしだり柳のとを、にも妹が心にのりにけるか

出廬抄註

も。

意 川邊の柳を叙したるまでにて他意なし。

#### 第三節 二頁

〔廬〕 いほりに同じ、草木を引結びて作りたる假の家の義。(和名抄、十) 農人作、  
廬以便三田事。  
意 茲に至つて廬の所在を咏じ以て全篇



の題目出廬の一廬字に初めて觸着せるなり。

第二章 三頁

第一節 三頁

〔時知らぬ花〕 時知らぬは何時を限らぬ義。(伊勢物語)——山は富士の根。

意 萩、紫苑、白菊など其他いろ／＼の花は枯るゝことあるも、詩の中の花は常住のものなれば、即ち時知らぬ花に詩をたとへたるなり。

第二節 三頁

第三章 四頁

全章先づ一の廬の状を叙せるのみ。

〔いつき〕 いつくなり、謹み仕ふる義。

(古事記、上、四十六) 此之鏡者專爲二我御魂而如レ拜三吾前二伊都岐奉。

意 廬に祭れる神や何、即ち詩の神なり。詩の神を念ずれば我廬は四時常に春なりといへるなり。

此の章、實の世の花の散り易く、詩の中の花の常磐なるを云へり。

第一節 五頁  
〔常住〕 常住不壞、佛經語、常に存在するの義。

〔瑠璃〕 玉の類、其の色種々あれども、打任せて、青きをいふ。梵語、澄み渡りたる空を形容して——色といふ。

〔氷輪〕 月の形容。(蘇軾宿二九仙山詩) 夜半老僧呼レ客起、雲峯缺處湧二一(陸

游月下詩) 玉鉤定誰挂、一丁無レ轍、

〔晦日〕 月隱の略、月の全く缺けて影なきに至れること。三十日。(拾遺、雜秋、

貫之) 師走のつごもり頃に身の上をなげきて。

意 空に澄める圓き月は、三十日に至れ

ば全く缺けて美人の色衰へて地に歸する如くなれども、詩の中の月は缺くことなくして、永久に存在すと稱へて、詩を賞美せるなり。

第二節 五頁

〔望〕 望月に同じ、陰曆の十五日をいふ、月の盈ちて全く圓くなりたる稱。(伊勢物語、九十六段) そのころもみな月のもちはかりなりければ。

意 廬に祭れる詩の神を念ずれば、浮世の月は缺くる時あれども、此處には絶えず望の月明かに照れると云ひたるなり。此の章、實の世の月は缺くれども詩の中の月常に明らかなりといへるなり。



第一節 六頁

〔目下江〕 大和にあり。――の入江の蓮  
花蓮實のさかり人ともしきろかも（古事  
記赤猪子の歌）歌の意、ともしきは美ま  
しき義にて、吾今斯くまでに老いざらま  
しかば、婚れましものをと、若く盛りな  
る人を羨みしなり。

（古事記朝倉宮上巻）亦一時天皇遊行  
到於美和河之時。河邊有洗衣童女。其容  
姿甚麗。天皇問其童女汝者誰子  
答自己名謂引田部赤猪子。爾令詔  
者汝不嫁夫。今將喚而還坐

然汝守志待命。徒過御年。  
是甚愛悲心裏欲婚。憚其  
極老不得成婚而賜御歌其歌  
曰。美母呂能伊都加斯賀母登。加斯賀母  
登、由由斯伎加母。加志波良袁登賣。又  
歌曰。比氣多能。和加久流須婆良。和加  
久閉爾。韋泥豆麻斯母能。淤伊爾祢流加  
母。爾赤猪子之泣淚。悉濕其所服之丹措  
袖。答其大御歌而歌曰。美母呂爾。都久  
夜多麻加岐。都岐阿麻斯。多爾加母余良  
牟。加微能美夜比登。又歌曰。久佐加延  
能。伊理延能波知須波那婆知須。微能佐  
加里毘登。登母志岐呂加母。爾多祿給其  
老女以返遣也。故此四歌者。志都歌

出廬抄註

於宮。故其赤猪子。仰待天皇之命。既  
經八十歲。於是赤猪子以爲望命之  
間。己經多年。姿體瘦萎。  
更無所恃。然非顯待情。不  
忍於悒而全持百取之機代物。參出  
貢獻。然天皇既忘先所命之  
事。問其赤猪子曰。汝者誰老女何由  
以參來。爾赤猪子答曰。其年其月  
被天皇之命。仰待大命主于今日。經  
八十歲。今顏姿既者。更無所恃。然  
顯白己志。以參出耳。於  
是天皇大驚。吾既志先事。

なり。解雄略天皇美和川の邊に遊び玉ひし  
時。赤猪子の河邊に衣洗ふを見玉ひ、様  
々の御物語りの末、汝他に嫁せずしてわ  
れ、後に召し出さんと宣ひて還宮せしま  
しぬ。赤猪子は天皇の仰せを畏みていま  
かくと待ち居たりけれど、天皇は遂に  
忘れ玉ひて約を履まらず空しく八十年を経  
て、赤猪子も老いさらばひて悲しき姿に  
なりしが、折角永の歲月待ち居たるもの  
を、斯くて此儘に朽ち果てんも忍び難し  
と、天皇に物を獻りしに、天皇は赤猪子  
を見て、汝は何者ぞと怪しみ問ひ玉ひぬ。  
赤猪子は始終の事どもを詳に言上すれ  
ば、天皇も大に驚き、赤猪子が約を守り

五



て空しく身の盛りを過ししことを憐れとおぼし歎き玉ひて、歌を詠み玉ふ、赤猪子これを見て泣きけるが其涙丹摺の袖を濕しぬとぞ。

〔丹摺の袖〕 紅く摺りたる袖。前の日下江の條参照

意 赤猪子の悲みを感み、老といふ事を歎せるなり。

第二節 七頁

〔みもろの山〕 大和國平群郡にあり。またみひろの山ともいひ。龍田川に臨めり。

〔神籬〕 神社の周圍の籬。

〔忌々しきさまの〕 忌々しきなり。歌に『由々斯伎加母、加志波良袁登賣』第一節

日下江の條参照。  
意 天皇の赤猪子に對して賜はりし歌に基づき、老いたる人の神籬の白櫛の如く忌々しきを悲しめるなり。

第三節 八頁

〔身の盛り人羨しき〕 赤猪子の日下江の歌の四五の句をひきたるなり。羨しきはうらやましき義なり。

意 心猶若くして身早く老い、歲月過ぎ去りて、人を苦むるを悲みたるなり。

第四節 八頁

〔促り〕 責めらながすこと。(白文、一ノ五) 遂促微矣。

〔時の鐘〕 時を報ずる鐘。

〔花顔の春の夜〕 人の若き時の短さを春の夜にたとへしなり。

〔頭の上に雪を送れば〕 人を白髪とすればの意。

意 獨り赤猪子のみならず、時去り老來れば、誰の身の上にも頼もしきことは無くなりて悲みのみ徒らに遺るを歎けり。

第五節 九頁

〔不老の國〕 人の老いざる國にて。即ち——は詩の國をさして云ひたるなり。

意 人は斯くの如く老ゆるも、詩の國は不老の國にて、實世界の人は老ゆるとも詩國の人は老いずとなり。

全章の意、人世には老あり、詩國には老なきことをいへるなり。

第六節 十頁

〔美和川〕 大和の國、式上郡にあり。初瀬川の流れなり。赤猪子は此川にて衣洗ひたりし時、雄略天皇に愛で思はれまゐらせしなり。

〔たゞむき〕 腕若くは臂の稱。(和名、三ノ十一) 太々無岐一云宇天(神紀、廿二) 臂、(古事紀、十ノ卅二) 斯路岐多陀牟岐。

〔白拷〕 又シロタへ。穀の木の皮にて織れる布の何色にも染めざるを——といふ。色いと白き古の衣料のものなり。



意 赤猪子が美和川にて洗濯をなし居れる時の美しさの見ゆる状にて、詩より云へば赤猪子今猶若くして是の如く目前に在りとなり。即ち第四章全篇は赤猪子を

第五章 十一頁

第一節 十二頁

〔閻魔〕 閻魔、閻羅と同じ。梵語。(翻譯名義集) 靜息と翻す。惡を造るものを息むる義、鬼官の總司なり。また、兄及妹地獄の主となり、兄は男のことを治め、妹は女のことを治む、故に雙王ともいふ。——の使者は梵には阿傍といふ即ち阿傍は地獄の卒の義。

第二節 十二頁

〔冥土〕 黄泉ともいふ。萬葉集に黄泉をよめり、夜見の義なり。○十王經に无佛世界亦名預彌國。○人死して後に魂魄の行くべきところ。意 閻魔の使者は人の生命を促つて、黒鐵の鞭にてむちうちつ死の國へと導くとなり。

〔小夜嵐〕 小夜は真夜といふ義。またさは發語にて夜といふに同じともいふ。

〔さらば〕 さらば行かんの意、左様ならばといふに同じ、訣別の語。

意 人の身を竹の葉末の露に形容し、小夜嵐に竹の葉末の露の是非なく散る如く、人の死し行く時の其の悲しき消息を、墜露の聲にたとへ、誰か其の甚しくあはれなるさまを、未だ死せざる人の能く知り得んやと云へるなり。

第三節 十三頁

意 海棠の紅の莓苔に點する時、花の芳魂の何處にゆくかを知るものはなしと云ひて、言外に人の死して落着するところ

出處抄註

を誰か知らんと歎ぜるなり。

第四節 十三頁

〔天つ星〕 天の星の義なり。天津風、天津空、天津神などいふ語法。

〔馬嵬が原〕 楊貴妃の殺されしところなり。(長恨歌) 馬嵬坡下泥土中、不見三玉顏。空死處。

〔颯風〕 土を捲き上ぐる烈しき風の義。〔麗人〕 あてやかなる人。即品よく美しき人の義。楊貴妃をさしていへるなり。

意 紫の星落つるとは、楊貴妃の死期の逼れる前兆として形容せるなり。颯風起りて、草木のさわぎ立てるとは、兵士等の暴れ起ちて楊貴妃を殺せくと叫ぶに



たへとへ、さて是の如くにして可惜麗人も  
草の中の屍となれりといへるなり。

第五節 十四頁

〔白綾〕 白き綾絹なり。

〔しどもなく〕 しどけなくなり。

意 縊り殺されたる楊貴妃の頸に、纏ひ  
つける白綾の恰も白蛇の血を吸ふが如し  
と且つ厭ひ且つ悲しみ、又美人死して唯  
空しく香を地に遺すのみと悲しみたるな  
り。貴妃の凭りし椅子さへ身摺と名づけ  
られて香木として後世に珍重されたりと  
いふ俗説もあり。

第六節 十五頁

〔香木〕 香ある良き木の義。

〔翡翠〕 鳥の名、かはせみに同じ。翠な  
す美しき髪を形容して「一」といへるな  
り。(白居易詩) 舞鬟金一歌頸玉蟾螭と  
いへるとは少し異なるなるべし。  
意 死の残忍酷烈なることを云ひて、人  
の世はあぢきなしと悲みしなり。

第七節 十六頁

〔返魂の香〕 香の名、烟直上して烟中  
に死者の面影を顯すといふ。漢武帝李夫  
人の故事は人の知るところなれども、又  
唐陳鴻の長恨歌傳の後に玄盧子の誌すと  
ころによれば、道士姓は王名は舟なるも  
の、還形燭を焚いて玄宗に貴妃と相會す  
るを得せしむ云々とあり。

〔玉の簪兒〕 長恨歌には金釵とあれど

——としたるは蓋し作意なるべし。臨  
叩の道士、玄宗皇帝の爲に、死せる楊貴  
妃を虚無漂渺の間の仙山に尋ね得て、貴  
妃に金釵細盒を托せられ、歸りて之を皇  
帝に獻ぜしに、皇帝見覚えあるものなり  
しかば、いよゝゝ悲み恨みしといふ。詳  
くは白樂天の長恨歌及び陳鴻の長恨歌傳  
に見ゆ。

第八節 十六頁

意 現世にては如何なる美人も死して、  
誠に情けなく口惜きも、詩の國は不老不  
死の郷ぞやとなり。

第九節 十七頁

出廬抄註

〔九重の門〕 禁中の稱、九つ重なれる義。

(楚辭) 君之門兮——  
意 美しき宮女は九重深き禁中の結構な  
るところに居れども、夏の暑には困しめ  
られて弱れるさまをいへるなり。

第十節 十八頁

〔玉珮〕 玉のさげもの。  
意 香先はしつて花咲くが如く。珮の音  
先づ聞えて貴妃見はるゝとなり

第十一節 十九頁

〔おほどか〕 おほやうといふに同じ。(宇  
津保、樓の上、上) しづかにちこの御あ  
りさまともなく——なり。(源語、竹川、四  
十三) いとわかやかにおほどけたる心地



す。

第十二節 十九頁

〔月の桂の都〕 支那にて想像の説に、月の中に桂の樹あり、高さ百丈、人ありて常にその桂を伐るに、樹の創隨つて合す、其人を吳剛といふと。——は即ち月宮殿なり。

〔生れまして〕 生まるゝの敬語なり。

〔萬葉、一ノ十六〕 かし原のひじりの御世のあれまし、神のごとく。

〔楊氏の妃〕 楊貴妃なり。蜀州の司戸玄琰の女なり。名は太真、唐の玄宗皇帝の天寶四年に貴妃となり、同十五年安祿山の亂に、馬嵬が原にて殺さる。

意 楊貴妃を寶劍のまはりに堅きもの憎き人なき如く、たゞ人ならぬ楊貴妃の傍には夏の威も冒さずとなり。

第十三節 二十頁

〔雲鬢〕 美しくしき髪形容。(杜甫月夜詩) 香霧一濕、清輝玉臂寒。

〔遠山眉〕 美しくしき眉形容。(杜牧詩) 笑別一——(西京雜記) 文君姣好、眉色如望一——。

〔照陽殿〕 楊貴妃の住みし御殿の名。(杜甫詩) 憶昔霓旌下南苑、々々中萬物生顏色、一——裏第一人、同輦隨君侍君側、(白居易長恨歌) 含情凝睇謝君王、一別音容兩渺茫、一——裏恩愛絕、蓬萊宮

に在りて死せずとなり。全章の意、人世には死あり、詩國には人死せずとなり。

中日月長。

意 九、十、十一、十二、十三節をすべて、詩中の楊貴妃は今猶是の如く美しく目前

第六章 二十頁

〔洪荒〕 大昔のこと。(謝靈運詩) 詳觀三記牒一——莫傳。

〔不周の山に頭突きして〕 女媧氏の條を見よ。頭突は頭をもて衝きかくること熊本邊の方言。又相撲道にも此言葉あり。意同じ。

〔雄叫び〕 雄々しく叫ぶ義。(神代記、上、廿二) 雄詰(古事記、上、十五) 伊都之男建踏建而。

出廬抄註

〔天柱折れて地維は缺け〕 女媧氏の條を見よ。

〔日は蝕まれ〕 蝕むは蟲の食ふなり、日の光を失ふをいへり。

〔とこととはに〕 永久變りなき義。(萬葉集二、卅) わがみかど千代——にさかえんと云々。

〔女媧氏〕 (史記) 女媧氏風姓蛇身、有三神聖之德、代宓犧氏立、號曰女希氏、木德



王、始作<sub>二</sub>筮<sub>一</sub>、諸侯有<sub>二</sub>共工氏<sub>一</sub>、任<sub>二</sub>智刑<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>強霸<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>王、以<sub>レ</sub>水垂<sub>レ</sub>木、乃與<sub>二</sub>祝融<sub>一</sub>戰、不<sub>レ</sub>勝而怒、乃頭觸<sub>二</sub>不周山<sub>一</sub>崩、天柱折、地維缺、女媧乃鍊<sub>二</sub>五色石<sub>一</sub>以補<sub>レ</sub>天、斷<sub>二</sub>鼇足<sub>一</sub>以立<sub>二</sub>四極<sub>一</sub>、聚<sub>二</sub>蘆灰<sub>一</sub>以止<sub>二</sub>滔水<sub>一</sub>、以濟<sub>二</sub>冀州<sub>一</sub>、於是地<sub>二</sub>平天成<sub>一</sub>。(淮南

第七章 二十二頁

第一節 二十二頁

意 白きを彩色の母とし、眞理を白きに寓せて説きたるなり。

第二節 二十三頁

意 女媧氏眞理を表する白き石を取りし

第八章 二十三頁

子)昔共工與<sub>二</sub>顓頊<sub>一</sub>爭<sub>レ</sub>帝、怒而觸<sub>二</sub>不周山<sub>一</sub>、天維絶、地柱折、故此山缺壞不周匝也。  
意 此章は以下第十四章に至るまでの總序として、先づ女媧氏補天の古き神話的の譚を取り出し來れるなり。

以來、世に眞理なるものありて、水は低く流れ、火は高く燃ゆるに至れるとなり。全章の意、説かずして明らかなり。白石と眞理との事は古説あるにあらざ、新らしき作意なり。

意 青色は仁を表すとなし、靑石を煉れるより以來世に仁ありとなせるなり。これも亦女媧氏是の如き意によりて是の如き事をなせりといふ傳説あるにはあらず。作者の想像なり。

第二節 二十四頁

〔大人〕 徳ある人の義、(易)夫一者與<sub>二</sub>天地<sub>一</sub>合<sub>二</sub>其徳<sub>一</sub>與<sub>二</sub>日月<sub>一</sub>合<sub>二</sub>其明<sub>一</sub>與<sub>二</sub>四時<sub>一</sub>合<sub>二</sub>其序<sub>一</sub>與<sub>二</sub>鬼神<sub>一</sub>合<sub>二</sub>其吉凶<sub>一</sub>〔衆生〕 佛經の語、諸々の生けるもの、義。

第九章 二十五頁

第二節 二十六頁

出廬抄註

意 世に仁といふものあればこそ、親は不孝の子を愍れみ、徳ある人は衆生を救ふに至るなれとなり。

第三節 二十四頁

意 知らぬ人同士のはからず道連となりて相宿りたる夜半に、病ひに罹りて看護せらるゝも是皆世に『仁』なるものあるが故の妙作用なりとなり。全章仁を説きて、前の章の眞理を説けるに對せり。

〔うなる兒〕 うなると同じ、童の稱 髪



をあげずしてうなじにすゑある意、男女共に十二歳までをいふ。自然のさまじくの美しさを示せるなり。

第三節 二十七頁

意 人の美しさをいへるなり。

第十章 二十八頁

第一節 二十九頁

意 次の節と共に、張り弓の弦の撓まざるが如く、勇士の念ひの烈しく強きは、胸に『希望』の燃ゆるゆゑなりとなり。

第二節 三十頁

〔風餐〕（鮑照詩）——委松宿、雲臥恣天

此の章のすべては、世に美といふものありて、世を成り立たしむる一分子となり居れりといへるにて、猶前の章の、世に仁といふものありて、世を成り立たしむる一分子となり居れりといへるが如し。

行。

〔露宿〕（淮南子）武王伐紂、舍露宿。風餐露宿は暖かに寝ね、ゆたかに食はざる義。

〔樓蘭〕正しくは樓蘭王といふべし。王の字を省けるは詩の用語法にて、唐詩に

其例あり。

（漢書傅介子傳）平樂監傅介子持節使誅斬——王安歸首懸之北闕（崔湜詩）漢家征戍客、年歲在——。意 第二節の勇士の面影を叙したるなり。

第四節 三十頁

意 五節と共に、賢者の心の廣さも、胸に『希望』の燃ゆればなりとなり。

第五節 三十一頁

〔世のさがな口〕 さがなしは不祥または悪き義、——は世の悪口なり。

〔小人〕 しれもの、愚なるもの、義。

〔賢愚の差、三十里〕（世説）魏武嘗過

出廬抄註

曹娥碑下、揚修從、碑背上、見題作黃絹、幼婦、外孫、鰲曰、八字、魏武謂修曰、解不、答曰解、魏武曰、卿未可言、待我思之、行三十里、魏武乃曰、吾已得、令修別記所知、修曰、黃絹、色絲也、於字爲絕、幼婦少女也、於字爲妙、外孫女子也、於字爲好、鰲曰、受辛也、於字爲辭、所謂絕妙好辭也、魏武亦記之與、修同、乃歎曰、我才不及卿、乃覺三十里。

〔有るが中には云々〕 凡人多くは物を失ひて後、物の價を悟るを感むとなり。

意 賢者も亦胸に希望を抱き居るが故に、如何なる迫害を受けても、終には我



が意の如くなるべしと堅く信じて、自若たりとなり。

第六節 三十三頁

〔幾何〕 數學の一科なり。  
〔障子の破れが舌〕 障子の紙の破れたるさま譬へば猶人の舌の如きを云へるなり。

意 何人も希望を抱かざるはなしとして、こゝには書生も幾多の希望を抱き居れるとなり。

第七節 三十四頁

〔賓客〕 稀人の音便、客の義。(源、帚木、卅八) せらうどはね給ひぬるか。  
意 前章に意は同じ。こゝには藝妓を假

りて、こもまた希望を抱かざるにわらずとなり。

第八節 三十六頁

〔かぢ布〕 荒布の類、細く狭くして皺多し、遠州相良より多く産するゆゑ、一名さがらめともいふ。宗祇の歌に『釘の浦うち来る浪の音するは澳のかちめのしわざなるらむ。』

〔海人〕 海に漁を業とするもの、あまびと。日本紀に白水郎とあり。

第九節 三十七頁

〔風は一年、二十四番〕 曆の語に五日を一候とし、三候を一氣とし、二氣を一月とし、四時十二月、一年にて二十四氣、

即ち春、立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、夏、立夏、小滿、芒種、夏至、小暑、大暑、秋、立秋、處暑、白露、秋分、寒露、霜降、冬、立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒、なり。春は東、夏は南といふが如く、其の季其

第十一章 三十八頁

第二節 三十九頁

〔襦染〕 黒き色に絹布などを染むるに、藍の青きを下染となす時は、青きは黒きを妨げずして、黒きは却つて其の色を増すなり。

〔澤を増す〕 臙脂は紅きものなれども、黒にあひてはおのれの紅きを失ひて黒の

の氣に相應して吹く風を番の風といふ。  
〔減る潮〕 引く潮  
意 全章の意、希望は人世の一大要素にして、これあればこそ世は成り立つなれと歌へるなり。

澤を増すに止まるものなり。絹などを黒に染むるに、佳色を得んとすれば、黒く染めたる後臙脂を加ふるは常の法なり。藍花以下二句は黒の強きをいへるなり。  
意 第一節第二節は、黒き色を力の代表と見做して、世には力あり力は世を成立たしむる一大重要のものといへるなり。



第三節 四十頁

〔とゞろに〕 物の響き轟く音。(萬葉四ノ卅二) 伊勢の海の磯も——(同十四ノ十) 岩も——おつる水。

〔我大海に到るべきなり、以下十三行〕 水の海に到らんとする意を、人のやうに取り倣して説けるなり。

〔積礫〕 小石なり。

〔潰やしてん〕 崩すこと、(日本紀)いはくやす、

意、力の中にて先づ水の力を取り出し來り、其の遂には巖を裂き岸を崩して海に到る趣の壯なるを云ひしなり。

第四節 四十二頁

〔宣らせ〕 述る義、言ひ聞かす、告ぐ、

〔我は〕 吾に同じ、あが戀、(萬、十二ノ卅四) わぎも子が阿乎しぬふらし草枕たびのまろねにしたひもとけぬ。

〔還原を促る使者〕 還原は原へ還る義。

一切の物火にあへば形を失ひて、土より出でたるものは土に還り、天より來れるものは天に還り、各々其の本原に還るが故に火を——とは云へる也。

〔我、我が觸る、以下十七行〕 火を人に擬して、其の力をいへるなり。

〔蛩尾〕 四十五頁 宮殿などの屋の棟の端の飾物、俗にいふ鮎鉾の類。

〔阿房の宮殿〕 秦始皇帝の營みたる宮殿。

〔蒲〕 水草にして一根より叢生す、葉の長さ四五尺、幅七八分、蠟燭の如き褐色の穂を生ず。

〔燐々〕 火の弱き貌なり。師古曰——小光之燭也。

〔灼々〕 火の眼を射るが如く輝く貌。

第五節 四十三頁

〔日より來れるもろくの物〕 草木をいふ。實に日の光を得て其の生を營み形をなせるを以てなり。

〔汝等〕 四十四頁 汝等の義、(古事記)いまし、みまし、(萬葉十四ノ五) するがのうみおしへにおふるはまつらいましをたのみは、にたがひぬ

(史記) 三十五年除道道九原抵雲陽、塹山堰谷直通之、於是始皇以為、咸陽人多、先王之宮廷小、吾聞周文王都豐、武王都鎬、豐鎬之間、帝王之都也、乃營作朝宮渭南上林苑中、先作前殿阿房、東西五百步、南北五十丈、上可坐三萬人、下可建五丈旗、周馳為閣道、自殿下直抵南山、表南山之顛以為闕、為復道、自阿房渡渭、屬之咸陽、以象天極閣道絕漢抵宮室也、阿房宮未成、成欲更擇名之、作宮阿房、天下謂之阿房、隱宮徒刑者七十餘萬人、乃分作阿房宮、或作麗山、

〔赤龍〕 火の大なる材などに纏ひ絡むが



如くして燃ゆるを——と形容せるなり。

〔最大梁〕 うし、うしばかり同じ。梁の最大なるものをいふ。越中の方言。越中邊にては家を造るに、うしを態と人に見ゆるやうの建築法になし、漆などにてこれを塗るといふ。蓋し——の見事なるを誇るなり。此の句は——も火に敵せざるを云へるなり。

〔紅蓮〕 字の如し、火の燃えはせて熾くなる状をいへるなり。

〔扇極〕 扇の骨の如くに配置したる垂木。普通の極より美觀なり。風煽るの語に關係あり。

〔魔君云々〕 火の燃ゆる音を魔君の騒ぎ

暴る、聲と取りなしたるなり。

意 第四節第五節は火の力の強きを云ひたるにて、僅少の火と雖も如何なるものをも焼き盡して残すところなきを歌ひたるなり。

第六節 四十六頁

〔さやぎ〕 そよぎに同じ、(古事記、中の十)うねび山許能波佐夜藝奴加是布加牟登須。

第七節 四十七頁

〔沈〕 沈香の略、香の名、熱帯に産する香水。水に入れて浮くものを淺香と云ひ、沈むものを沈香といふとぞ。

〔玉巻く芭蕉〕 未だ開かざる芭蕉を云へ

るなり。

〔生絹〕 絹布の生絲にて織りて練らざるもの。句は緑の生絹の日に透くが如しと芭蕉の開きたるもの、日を受けたるを比へたるなり。

〔鸚羽〕 鸚は想像の鳥、五彩、鳳に似て青色多し、芭蕉の開きたる葉を鸚の羽の風に搖げるが如しといへるなり。

第十一章 四十八頁

第一節 四十九頁

意 五色の石を女媧氏は取りて煉りしが、猶一色の石を取り遺れし爲めに世は圓滿ならず、人の泣くべき世となれりと

出廬抄註

意 第六第七節は草の如き小なるものにも猶力の存するを云ひたり。

第八節 四十八頁

意 強力ありて人の世はじめて存立すと歌ひたるなり。全章の意、力の大なるを讃して、此ありて世は空虚ならず、人生は夢ならずといへるなり。

咏ぜしなり。

第二節 五十頁

〔玲瓏〕 (説文)明かなる貌 (白居易詩)月透——光。露に影無く——



と凝りは、水色の石の形容なり。

〔晶瑩〕 透明の貌、(李群玉中秋月臺看月

詩) 皓耀迷三鯨目、一失蚌胎。句意又水

色の石を形容せるなり。

〔色を奪はず〕 水色は他の色に混じて他

の色を變ずること無ければ云へるなり。

第三節 五十一頁

〔長久〕 永久變らずとこしなへなること

常磐の約。(萬、十一ノ九) 常石有云々。

意 女媧氏天を補ふに有色の石を取りて

無色の石を遺れし爲めに、世に長久とい

ふことの無くなりたりと歌ひたり。是は

本より作者の空想もて斯く取り做して云

へるなり。かゝる神話的傳説あるにはあ

らず。

第四節 五十二頁

〔峻しき〕 峻しき義、(萬、三ノ卅九) あら

れふるさしみがたけをさがしみとくさと

りかねて妹が手をとる、(仁徳紀十一ノ十

八) はしだての佐餓始枳山もわぎもこと

ふたりこれればやすむしろかも、(古事記

下ノ八) はしだてのくらはし山は佐賀斯

祁杼いもとのぼれば佐賀斯玖母阿良受、

意 高く峻しき山も長久なる能はず日夜

く々に瘦せゆくとなり。

第五節 五十三頁

〔龍卷〕 旋風の爲に水の柱なして天へ上

るをいふ。龍の巻き上るなりとて――の

名は起れるなり。

〔あせ涸れて〕 あせは浅くなる義、(萬、

三ノ廿二) 久方の天のさくめがいは舟の

はてし高つはあせにけるかも、

意 龍卷さへ起りしといふ傳説ある大い

なる沼も永久なる能はずして水涸れ、野

と變じて、菫花の咲くやうになれりとな

り。

第六節 五十四頁

〔天人〕 佛經に出づ。人間以上のもの、

天女に同じ。天上を飛行する女、頭に華

鬘を着け、羽衣を着、身に光ありて壽を

知らずと、(源、手習、十七) いみじき天人

のあまくだれるをみたらんやうにおもふ

も、

〔五衰〕 五衰に大小あり。大五衰は、一、

衣服垢穢、二、頭上華萎、三、腋下汗流、

四、身體臭穢、五、不樂本座、小五衰の

一、樂聲不起、二、身光忽滅、三、浴水

着身、四、着境不舍、五、眼目數瞬。天

人も報盡き福衰ふれば――の相現するな

り。

〔野分〕 野の草を吹き分くる意にて、秋

冬の間に吹く暴風の義。

意 壽を知らざる天人も猶永久なり得

ず、蝶の如き世にも人にも害を與へざる

優しきものにも猶且永久といふことなく

て衰へゆくとなり。



第七節 五十五頁

〔怒り毛〕 獸類の怒る時逆立つ毛にて、脊筋に添うて生ふる毛をいふ、鬣

〔獅子王〕 獅子の王なり。

〔陽炎〕 かげろひ、かぎりひ、いとゆふ、皆同じ。長閑なる春の日に、空中にちら

〜と立ち上りて見ゆる氣。(萬、十七、)今さらに雪ふらめやもかげろふのもゆる

春邊となり行くものを、

〔椰樹〕 熱帯に生ず、棕櫚に似て大きく直立すること五六丈、葉は梢に簇りて鳳

尾の如し、花は葉間に開き、白くして千葉蓮花に似たり、材は堅く良くして舟車

に作る、葉は屋根を葺き、又帆に編む。

意 猛き獅子王も永久なる能はずとなり

第八節 五十七頁

〔梅川〕 近松門左衛門の作れる淨瑠璃中の婦人。但し同じ浮世以下三行は、近松

の淨瑠璃には無し。此は宮蘭節の歌、道行合炬燵の中の梅川の語なり。「上略同じ

浮世に同じ花、芳野初瀬に常夏の櫻が咲くぢやあるまいし、雪は白うてお月さん

は何時でも圓いぢやないかいな、下略

〔芳野〕 大和にありて櫻の名所なり。

〔初瀬〕 前に同じ

〔常夏〕 何時も夏なること、とこしなへなること、(萬、十七、四、長歌)そのたちや

まにとこなつにゆきふりしきて、

意 人世いづくにか永久あらんや、實に

梅川の云へるか如しとなり。梅川の語の本意は、常夏の花も無く、方なる月も無

く黒き雪も無し、百居ても同じ浮世に同じ花月はまん丸雪は眞白といへる古き狂

歌師の辭世の歌を踏まへて、人世奇なること無し、といふにあるなり。されどこ

ゝにはたゞ其の常夏の櫻が咲くぢやあるまいしといふところだけを裁ちて取りて

人世永久なることなしと用ゐたるなり。

第九節 五十八頁

〔後の世までも迷はん〕 (藤原俊成長秋咏藻卷中) 秋の頃嵯峨の山に遊びけるに行きくしてほのみける女の許に屢々文つか

出處抄註

はしけれど返事もせざりければ遣しける

「うかりける秋の山路をふみそめて後の世までもまどふべきかな、蓋し此の女後

に俊成の妻となり、定家を生めるなり。

〔我をも忍ぶ人あらん〕 (同集卷下) 撰集のやうなることしける時古き人の歌ど

ものあはれなるなどを見て咏める「行末は我をも忍ぶ人やあらん昔をおもふ心ならひに」

〔桐火桶〕 〓の體といふ語あり、俊成卿歌を按ずるに、古淨衣を着て〓〓を擁き凝然靜坐せしをもて然る語さへ出でたるなり。

〔俊成〕 (大日本史) 藤原俊成は幼名顯廣



権中納言俊忠の子(定家の父)なり、和歌を藤原基俊に受く、後鳥羽帝に仕へて皇太后宮太夫正三位に上る、世に五條の三位と稱す、安永中薙髮して釋阿と號す、曾て後白河帝の勅を奉じて千載和歌集を撰す、建仁三年歳九十、筋力衰へてまた朝する能はず、帝其寵を極めんと欲し、仁和の故事に倣ひて賀を和歌所に賜ひ、屏風及び褥を設けて坐と爲し、御製の和歌及び鳩杖を賜ふ、世以て異數となす、元久元年薨す、年九十一、著す所古來風體抄あり、家集を長秋詠艸といふ、兼て圖畫を善くし、頗る雅致あり。

〔世の中云々〕 (同集、卷上、無常二首の

内)世の中をおもひつらねて眺むればむなしき天に消ゆる白雲。  
意 俊成の和歌の如く、世の果敢なきは雲の消ゆるが如く、何一つ永久なるものなしとなり。

第七節 六十頁

〔卯月〕 卯の花月の略、陰曆の四月なり。四月となれば花散り盡すなり。

〔十六夜〕 陰曆十六日夜の稱、既望。月は既望より缺くる也。

意 遙に前の第二第三第四第五章に照應し、花を云ひ、月を云ひ、戀に移り、赤猪子の思ひ詰めたる戀も老いずしてあれば叶ひしならんが老いたれば其戀も空と

なり。また絶世の美人揚氏も終に死に抵抗すること能はざりしを詠じたり。花も月も戀も色も、皆永久なる能はざれば、恨むも甲斐無く、如何とも爲難しとなり。

第十一節 六十一頁

〔ゆめの國〕 夢の中といふが如し、頼むに足らぬをいひしなり。

意 世に眞理ありとも、世に永久といふことの無ければ、眞理もまた實に頼むに足らぬものなりとなり。第七章に照應せり。

第十二節 六十二頁

意 既に永久なければ仁もまた風の中の花の香の如く、はかなしとなり。第八章

出廬抄註

と呼應す。

第十三節 六十一頁

〔燕虹〕 兵書、全流の水軍傳に出づ。きれくの虹にして、暴風雨の前に顯はるといふ。

意 美しきといふことも永久なければ、はかなきこと暴風雨の起る前の一時の燕虹の如きものにて忽ち消ゆるものなりとなり。第九章に照應す。

第十四節 六十二頁

〔玉手箱〕 (萬葉、卷九、詠水江浦島子一首并短歌) 春日之、霞時爾、墨吉之、岸爾出居而、釣船之、得乎良布見者、古之事會所念、水江之、浦島兒之、堅魚釣、



鯛釣矜、及七日、家爾毛不來而、海界乎、  
過而榜行爾、海若、神之女爾、避爾、伊  
許藝趨、相詭良比、言成之賀婆、加吉結、  
常代爾至、海若、神之宮乃內隔之、細有  
殿爾、携、二人入居而、老目不爲、死  
不爲而、永世爾、有家留物乎、世間之、  
愚人之、吾妹兒爾、告而語久、須臾者家  
歸而、父母爾、事毛告良比、如明日、吾  
者來南登、言家禮婆、妹之答久、常世邊  
爾、復變來而、如今、將相跡奈良婆、此  
篋、開勿勤常、曾己良久爾、堅目師事乎、  
墨吉爾、還來而、家見跡、宅毛見金手、  
里見跡、里毛見金手、惟常、所許爾念久、  
從家出而、三歲之間爾、墻毛無、家滅目

八跡、此宮乎、開而見而齒、如本來、家  
者將有登、玉篋、小披爾、白雲之、自箱  
出而、常世邊、棚引去者、立走、叫袖振、  
反側、足受利四管、頓、情消失奴、若有  
之、皮毛皺奴、黑有之、髮毛白斑奴、由  
奈由奈波、氣左倍絶而、後遂、壽死祚流、  
水江之、浦島子之、家地見、(反歌) 常世  
邊、可住物乎、劔刀、己之心柄、於曾也  
是君、  
雄畧記に丹波國餘社郡菅川の人水江浦島  
子、舟に乗り釣して大龜を得、即ち化し  
て女となる、浦島子感じて婦として、相  
逐うて海に入り、蓬萊山に到る由あり。  
此時玉手宮は浦島子の得たるものなりと

いふ。  
意 世に希望ありても世に永久なければ  
之を得んと願ふも、玉手匣を開かんとす  
るが如く愚なることなるべしとなり。第  
十章に應ず。

第十五節 六十二頁  
意 世に強力ありても、永久なければ、

第十三章 六十三頁

〔現世〕 うつしは現在といへる義、うつ  
し心、うつし身。——は此の我等の現に  
居る世をいふ。  
〔天は歪みて云々〕 天は歪み地は傾けり  
とは漢土の相承の説なり。

出廬抄註

力は其の力の失はる、時のみに力の用を  
爲すにて、猶ほ燭の燃ゆる時は即ち蠟の  
耗はる、時なるが如し。故に力は有る時  
は即ち無くなりて、其實は不往不來に  
て、無きに同じと也。第十一章に應ず。全  
章の意、世に永久といふこと無きが故に、  
世の一切は有にして即ち無なりとなり。

(列子陽問篇)天傾西北、地不レ滿東南、  
〔北辰〕 北極星なり、又子の星、天の北  
極に當る所に位する星、常に一所に止つ  
て他に移らず、標準とする星なり、され  
ども其實は正北に在るにわらず。天文を



知るもの、皆知れることなり。

〔磯に打つ浪云々〕地は漸く南へと擴がり行くといふも古き説にて、佐藤信淵の著書には此の大勢を利用して、南面の海濱に新田を開き得べきことをさへ説ける

### 第十四章 六十四頁

#### 第一節 六十四頁

〔陶〕陶淵明をさす。淵明は柳をおのが廬邊に植ゑて五柳先生と稱したりし隱逸の詩人なり。(昭明太子撰陶淵明傳)陶淵明名元亮、或云潜、字淵明、潯陽柴桑人也(下略)

意 現世はいふに足らざれば世に對する

ほどなり。  
意 天地も整齊永久ならずして皆缺陷ある世界なれば、現世頼むに足ること無しとなり。

心を薄くして、悠然として我が廬に睡るべし、廬には柳あり、柳には客もありとなり。柳ありといふは虚中の實なれども、客ありといふは虚中の虚にして、全く其の人我に近く在るにはあらねど、在るが如くに云ひなせるなり。

#### 第二節 六十五頁

〔酒濁りあり〕(宋書隱逸傳)潜値其酒熟、取頭上葛巾、灑酒畢、還復著之、とあり、是即ち濁酒なるが故なり。  
〔琴に絃無し〕淵明絃なき琴を撫して常に獨り樂めり。(宋書隱逸傳)淵明不解音律、而蓄無絃琴一張、每酒適輒撫弄以寄其意、とあり、蓋し琴中の趣きを解するなり。

〔鼎々〕(陶淵明飲酒二十首内)道喪向千載、人々惜其情、有酒不肯飲、但願世間名、所以貴我身、豈不在一生、一生復能幾、倏如流電驚、鼎々百年内、持此

### 第十五章 六十六頁

欲何成、(注)劉履曰、大道久喪、人欲日滋、不肯適性、保真而徒戀世榮、一生能幾、乃不速悟、何所成其名乎。(陸游詩)浮生役、聲利、百歲常一。是亦百歲幾許もあらざるをいへるにて、禮記の鼎々爾則小人といへるに鄭氏の注して一人大舒也といへるとは義自から別なり。  
意 陶淵明を假り來り、陶淵明が濁酒を酌み、絃なき琴を撫で、詩を吟ずる聲を隣家の如く思ひ倣して、悠然と面白く世を送らんに如かずと感ずるとなり。



第一節 六十六頁

〔うつし身〕 世に現在したる身、うつせみに同じ。(萬、十二ノ十三)うつせみのつねのことばとおもへどもつきてしきけば心はなくを。

意 現身も現世も共にいふに足らずとなり。

第二節 六十七頁

意 現世も現身も共にいふに足らざるを思ひ知りたるゆゑに、心靜かに此廬に籠り居るとなり。

第三節 六十八頁

第一篇

〔晝日〕 又、ひねもす、朝より夕まで一日。ひねもすがらの略にて、夜もすがらに對する詞なり。(萬、十八ノ七)をふのさきこぎたもとほりひねもすに見ともあべくべきうらにあらなくに。

〔こととはに〕 永久變ることなく、とこしなへにといふ義。とはにと同じ。(萬二、卅)わがみかど千代常登波にさかえんと。

意 廬の中に閑居せる人と廬のありさまとを叙したるなり。

第一章 六十九頁

第一節 六十九頁より第三節 七十頁に至るまで、直に前篇の末章を取りて第二篇の起

第二章 七十一頁

第二節 七十一頁

〔廻り燈籠〕 かげどうろう、又は走馬燈、紙燈籠の中に、紙にて人馬其他種々の形を作りつけ、機ありて燈火の氣にて運らし、其影を映し見る玩具なり。

第三章 七十二頁

第一節 七十二頁

出廬抄註

首となせるなり。

意 此章は前章より今一段深く進みて、火の消えぬ間は走馬燈の動くが如く、或力の滅せぬ間だけ此世は轉變し、我が讎敵を忘れ得ぬが如く、我はいたづらに我が身を忘れ得ぬも愚なるとなりとなり。

〔造物〕 天地を造りしもの、(莊子)偉哉



夫一者將以子爲此拘々也。  
〔囹圄〕 牢屋、獄舎、罪人を捕へて籠め置く家。

第二節 七十三頁

第三節 七十四頁

〔醜〕 みにくき義、疾み罵る語、——つ翁——の丈夫、——男、——女、等、(萬八

第四章 七十四頁

第一節 七十四頁

〔大初〕 天地の最初なり。(易有ニ太極一疏) 太極謂天地未分以前、元氣混而爲一、即是——太一也。  
意 此人の世といふものは造物の編みな

の卅)うれたきや——ほとゝぎすわかと  
きのうらかなしきにおへどく。  
意 第三章は人の五尺の身を囹圄にたとへて、畢竟するに人は自ら人なりといひて誇るも、其の實は囹圄の中にある猿にも似たる醜きものなりと罵りたるなり。

せる盡頭知れぬ大なる網なりといへるなり。

第二節 七十五頁

〔狭き〕 せまきなり、ところせきなどいふ、目狭き笠、目狭きの網などいふ語あ

り。(後拾、戀二)あま雲のかへるばかりの村雨に所せきまでぬる、袖かな。  
〔桔梗ずき〕 網のすき方に普通にすくもの、桔梗ずきとの二種ありて、——とは中央の點より見れば自づから桔梗の花の如く、周邊に擴りゆくすき方にして、最も好く擴がり行くすき方なり。

第三節 七十五頁

〔網針〕 あみばりの略、また、あみすき針、網を結くに用うる針、竹又は鯨の鬚にて作る。西に没して東に出で南にくり北に現るは網針の働くさまを云へるなり。

第四節 七十六頁

出廬抄註

〔二ト目〕 網の一格をいふ。——の四方即ち上下左右には四つの結節あるなり。  
〔四線〕 實は二條の線なれども、結節の中央より云へば四方へ其の線走り居る故に、四線攢まるとはいへるなり。

第五節 七十七頁

〔仲らひ〕 親族ついきの人、間柄、かれとこれとの中、(源、東屋、三)常陸を上達部の筋にてなからひも物ぎたなき人ならず。  
意 世の中は恰も網の結び目の連なり居れるが如くにして、我も、人も、父母兄妹も、妻子も、朋友も皆相關聯せるものにして、眞の自由といふことは無し、人は



決して孤立し得るものにあらずとなり。

第六節 七十九頁

〔恒沙〕 恒河沙數の略、恒河の沙といふ義にて、數限りなく多き意。圓覺經、及び金剛經等に見ゆ。

第七節 七十九頁

意 第六、第七節は網の結目の相連るが如く、人間は誰も彼も縁故の繋り居るものにして、百代の前の祖先の血液も我に傳はり、萬里の外の人の思想も、我に移

第五章 八十二頁

第一節 八十二頁

〔實在〕 現實して在るもの。

りて存すとなり。

第八節 八十一頁

〔白壁〕 色白き玉なり、眞珠。萬、礫の上には爪木折りたき汝が爲に吾が潜き來し奥津白玉。

意 かるがゆゑに世の中に我れ一人善くてあらんも亦其の甲斐無き事なりといひて、終に現世の愛好するに足らざるをいへるなり。

意 此處に至り一轉して、實在の好ましからざるを云ひ、空想の悦ぶべきを道ひ

出せるなり。

第二節 八十三頁

〔虚空〕 おほざら、天。

意 實在は空にして、空想は却つて實なりとなり。

第三節 八十三頁

第六章 八十四頁

第一節 八十四頁

〔銅雀の臺〕 立派なる古昔の建築物。亦銅爵臺といふ。(魏志)建安十五年、冬太祖乃于鄴作銅爵臺、又(水經)因城爲之、高十丈、有屋百餘間(劉永之寄友詩)古硯自磨一瓦、坐毡還疊扇賓筵。

出處抄註

意 礫の貝殻は實在なれど、毎日浪に蹂まれ、日に曝されて、其の貝遂に何處にゆくぞと尋ねれば、即ち滅して空になり。鳥の飛びゆく途は此處と定まるところはなけれど、何時までも存在なし居る由を歌ひたり。

〔蜃樓〕 海上に現はる、樓閣などの幻影をいふ、空氣の暖かに穩なる日越中の魚津、伊勢の四日市など、對ひに山陰を受けし海上に、地方人家の影を鏡に寫すが如く、空氣の反射によつて映出するをいふ。昔は蜃の氣息に出づると信じ、俗に



蛤の龍宮を吐くなどいふ。嚴島にて蓬萊島、周防にて濱あそび、越後にて狐のもり、津輕にて狐の棚など、いひ、土地によりて其名を異にす。支那にては濟州の海に現するといふ。(本草)蜃蛟之屬、其狀亦似蛇而大、有角如龍、狀紅鬣、腰以下鱗盡逆、食三燕子、能吁氣、成樓臺城郭之狀、將雨即見、名蜃樓、亦曰海市、——は本より氣を結びて形を成せるものなれば、甚だ消え易きなり。

〔遺瓦〕 遺りたる瓦なり。銅雀の瓦は古きものなれば眞に稀なり、好事家珍寶として尊び、これを硯などに作りて愛翫す。偶これ有れば價を知らず。

〔バベルの塔〕 (新約全書、創世記第十一章) 全地は一の言語、一の音のみなりき、茲に人衆東に移りてシナルの地に平野を得て其處に居住めり、彼等互に言ひけるは、去來石を作り、之を善く煮かんと、遂に石の代に石を得、石沙の代りに石漆を獲たり、又曰ひけるは去來邑と塔とを建て、其塔の頂きを天に至らしめん、斯くして我等名を揚げて全地の表面に散ることを免かれんと、エホバ降臨りて彼人衆の建つる邑と塔とを觀玉へり、エホバ言ひ玉ひけるは、視よ民は一にして皆一の言語を用う、今既にこれを爲し始めたり、然れば凡て其爲さんと圖することは

禁止め得られざるべし、いざ我等降り、彼處にて彼等の言語を消し、互に言語を通ずることを得ざらしめんと、エホバ遂に彼等を彼處より全地の表面に散らし玉ひければ彼等邑を建つることを罷めたり、是故に其名バベル(淆亂)と呼ぶる是はエホバ彼處に全地の言語を消し玉ひしによりてなり。

第二節 八十五頁

〔妄執〕 佛經の語、妄なる執念一の雲は暗雲の霽れ難きに譬へたるなり。

〔解脱〕 佛經の語、塵世の煩惱煩累を脱すること。一の月は解脱の徳、明月の浮雲に蔽はれざるが如きをいふ。

意 實在を實とし、空想を空とするは、其實、虚妄の執着にして愚なることなるを、自他共に悟らざるは歎ずべしと慨けるなり。

第七章 八十六頁

意 此章は一變して碁を借り來りて、石

子は假物にて、碁を圍むものは石子の得



失殺活を争へども、眞に石子を得んとす

第八章 八十七頁

第一節 八十七頁

〔もさく〕 叢り茂りて亂れたる形

第二節 八十八頁

意 第八章は魚を釣る人の、たい釣を樂むのみにて、魚をばむげに大切には思はず、家に歸れば我身を勞して釣りたる魚

第九章 八十八頁

第一節 八十九頁 は、現世何ぞ、現身何ぞ以下四行なり。心より魚は假物まで四行は誤り入りたるなり三版の節は必ず正

るにはあらずといへるなり。

をも隣嫗に與へて顧みずとなり。

第三節 八十九頁 心をより魚は假物に至るまでの四行は第八章の第三節なるをわやまつて九章の一節の中に入れりとなり。

すべしとなり。

意 實在は釣の魚の如く、物質は碁の石の如し。其の物眞に向ふべきにはあらず、

たい我を樂ましむるに於て乃ち尙ぶべきのみとなり。

第二節 八十九頁

〔達人の碁は石子なくて濟み〕 (天中記曰) 翰林碁者王積薪、從三明皇幸蜀、寓宿深溪之家、但有婦姑止給水火、纔瞑闔戶、積薪夜聞、姑謂婦曰、良宵無以爲適、與子手談可乎、堂内無燭、婦姑各在東西室對談、已而姑曰、子已北矣、吾止勝九枰耳、遲明王具禮請問、出局盡平生之好、布子未及數十、姑謂婦曰、是子可教以常勢、因指示攻守殺奪揅應防拒之法、其意甚略、曰此已無敵人間矣、謝而別回顧失向之室矣。

出廬抄註

〔高士の釣は、鉤に魚餌無し〕 (合璧事類) 唐張志和居江湖、自稱煙波釣徒、垂釣不設餌、志不在魚也。

〔絃無くて琴聴くべくば〕 陶淵明の故事前に出づ。

〔宮商の調〕 音の調子の名なり。宮、商、角、徵、羽、の五音とし、これを別けて壹越、斷金、平調、勝絶、下無、雙調、鼻鐘、黄鐘、懸鏡、盤涉、神仙、上無、の十二律とす。

意 若し眞に能く達人たり、高士たり、趣を解する人たらば、碁に石も要せず、釣に餌も要せず、琴に絃をも要せざるべし、これに徴して實在の尙ぶに足らず空



想の悦ぶべきを知るとなり。

第十章 九十頁

意 實事は積んで歴史となり、空想は詩歌と顯ず、されど歴史のあたひは幾何も

第十一章 九十頁

第一節 九十一頁

〔ふりにしかた〕 舊くなりし方。といへる義、雨の降るにかけて云ひたるなり。(拾、雜上)世の中にあらぬところもえてしかなとしふりにたるかたちかくさん。〔すぢりもぢりて〕 千鳥は眞直に歩かざるものにて、——は千鳥の右により、左

なく唯詩歌のみ尊ぶべしとなり。

によりて歩くさまをいひたるなり。意 人が我思ふ通りに世の中を眞直に歴史來り得ざるは恰も千鳥の行くが如くにて、事は心と違ひ、思ひは空になりて、いつはりの痕のみ残れると歌ひしなり。

第二節 九十三頁

〔立涌に行く〕 或は立梓に作る。たちわ

き、たてわきに同じ。織模様の名。中膨れて兩端窄りたる線を連續す、即ち直線ならざる意。袍には大、小、雲、龍膽—等あり。

意 千鳥は眞直に歩かんと思はぬにはあらざるべきも、潮に妨げられ風にならるれば、心ならずも立梓に行くならん。されば其の足跡は千鳥の眞實の心のうつりたるにもあらぬなるべし。人間の一生

第十二章 九十三頁

第一節 九十三頁

意 物の表裏内外多くは異なるをいへるなり。

出廬抄註

第三節 九十五頁

〔候べく候〕 ゆきなり次第にしておくといふ義。(用捨箱)昔はゆきなり次第にし



ておけといふ事を、候べく候にやつてお  
けといふ者多かりしが近年は稀になり、  
適々いふものも其縁故は知らざるもある  
めり、これは昔の女の文には、候べく候  
といふ事多くありて、ゆきなり次第に書  
きても讀めし故、それを書くやうにして  
おけといふ意なり。

季吟十會集 寛文十年刻

つらねぬる歌の趣向は深かれや 永徳  
候べく候にあらましの文 素雲  
候べく候にあらましの文といひしをも  
て、此諺寛文前よりありしを知るべし、  
寶曆頃の輕口話に候べく候を人にすぐれ  
て多く書く女ありしが、あまりに筆まか

せに書きたる候べく候の讀めまじと思  
ひ、其側に候べく候を又書きて、再度  
思ふは二つ書きしを若しわやしむ事もや  
と、又傍に、此候べく候は書損ひの候べ  
く候にて御座候べく候、脇の候べく候が  
本の候べく候に御座候べく候と書きたり  
とぞ、此話をもて昔は候べく候を多く書  
きたるを思ふべし、今も童の手習ふ昔ふ  
りの文にはあれども、通用の文には稀な  
り、諺もやうく絶ゆるなるべし。  
意 我が愛せざる人は逆ふまでもなく好  
い加減にあしらふて埒を明けて仕舞ふ。  
第二節と共に即ち事實ほど虚妄なるはな  
しとなり。

第四節 九十六頁

意 褒むる男は物を買はず、買はんと思  
ふ男は買はんとするがために價の低から  
んことを欲して酷なることをいへど、終  
に却つて花を賣らるゝものなり、即ち事  
實ほど虚妄なるは無しとなり。

第五節 九十六頁

〔項王〕 楚の王なり。漢の高祖と天下を  
争ひ、敗れて烏江に死す。(史記)項籍者  
下相人也、字羽、初起時年廿四、其季父  
項梁、梁父即楚將項燕、項氏世々爲楚將、  
封於項、故姓項氏、項籍少時、學書不  
成、去學劍、又不成、項梁怒之、籍  
曰、書足以記名姓而已、劍一人敵不足

レ學、學萬人敵、於是項梁乃教籍兵法、  
籍大喜略知其意、又不肯竟學。(中略)  
項王軍壁垓下、兵少食盡、漢軍及諸候兵  
圍之數重、夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃  
大驚曰、漢皆已得楚乎、是何楚人之多也、  
項王則夜起飲張中、有美人一名虞、常奉  
從、駿馬名騶、常騎之、於是項王乃悲歌  
慷慨、自爲詩曰、力拔山兮氣蓋世、時不  
利兮雖不逝、雖不逝兮可奈何、虞兮虞  
兮奈若何、歌數闋、美人和之、項王泣數  
行下、左右皆泣、莫能仰視、(中略)項乃  
欲東渡烏江、烏江亭長艤舟待、謂項  
王曰、江東雖小、地方千里、衆數十萬人、  
亦足王也、願大王急渡、今獨臣有船、漢



軍至、無<sub>二</sub>以渡、項王笑曰、天之亡<sub>レ</sub>我、我何  
渡爲、且籍與<sub>二</sub>江東子弟八千人、渡<sub>レ</sub>江而  
西、今無<sub>二</sub>一人還、縱江東父兄憐而王<sub>レ</sub>我、  
我何面目見<sub>レ</sub>之、縱彼不<sub>レ</sub>言、籍獨不<sub>レ</sub>愧<sub>二</sub>於  
心<sub>一</sub>乎。項王の如<sub>レ</sub>き猛<sub>レ</sub>き人も虞美人の爲<sub>二</sub>に  
は涙を垂<sub>レ</sub>て泣<sub>レ</sub>きたり。

〔樂天〕 唐の白樂天、名は居易、世に聞  
えたる詩人なり。

〔樊氏〕 (雲溪友議曰)白樂天有<sub>二</sub>妾、樊  
素善歌、小蠻善舞、嘗有<sub>レ</sub>詩曰、櫻桃樊素  
口、揚柳小蠻腰、後樂天年老、又病<sub>レ</sub>風、  
欲<sub>レ</sub>放<sub>二</sub>樊素、素慘然泣下不<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>去、樂天亦  
愀然不<sub>二</sub>能對、遂作<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>情歌。  
意 氣は世を蓋<sub>レ</sub>ふ項王も虞氏には別を惜

みて泣<sub>レ</sub>き、樂天は又樊氏の爲を思<sub>レ</sub>ひて、  
我が傍に在<sub>レ</sub>らせんよりはと、特更<sub>二</sub>に之を  
放<sub>レ</sub>らんとしたるなど、皆其の心と其の跡  
とは違<sub>レ</sub>へりとなり。

第六節 九十七頁

〔蛇と動ける弓の影〕 (晋書樂廣傳)廣嘗  
有<sub>二</sub>親客、久濶不<sub>二</sub>復來、廣問<sub>二</sub>其故、答曰、  
前蒙<sub>二</sub>賜酒、方欲<sub>レ</sub>飲、見<sub>二</sub>盃中有<sub>レ</sub>蛇、意甚  
惡<sub>レ</sub>之、既飲而疾、于<sub>レ</sub>時河南廳事壁有<sub>二</sub>角  
弓<sub>一</sub>影作<sub>レ</sub>蛇、廣復置<sub>レ</sub>酒曰、復有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>見否、  
曰如<sub>レ</sub>初、乃告<sub>レ</sub>之、客豁然意解沈疴頓愈、  
(李東陽體齋病起見<sub>レ</sub>寄詩)疑<sub>レ</sub>蛇已辨杯中  
影、病鶴長懷海上心。弓の影の盃中に映れ  
るを見て蛇と思<sub>レ</sub>ひたるは、思<sub>レ</sub>ひあやまり

ながら、世にかゝる思<sub>レ</sub>ひあやまりは甚<sub>レ</sub>だ  
少<sub>レ</sub>からず、事實も誤<sub>レ</sub>まり傳<sub>レ</sub>へらるゝが多  
しといへるなり。  
〔犠牲〕 新物を神などへ饗<sub>レ</sub>すること。贄、  
(萬、十四、九)鴉鳥のかつしかわせをにへ  
すともそのかなしきをとにたてめやも。

第十三章 九十八頁

第二節 九十八頁  
〔蔑視〕 輕<sub>レ</sub>しめ侮<sub>レ</sub>る義。(東鑑)編<sub>二</sub>惣領<sub>一</sub>。  
意 浮世の人の實在を尊<sub>レ</sub>みて空想を蔑<sub>レ</sub>す

第十四章 九十九頁

第一節 九十九頁

出廬抄註

意 事實は虚妄なり、歴史は實を傳ふと  
いへど、其歴史なるものは虚妄をつらね  
てなるものなり。然るに自己を實在の奴  
隸として、歴史の犠牲となさんとするは  
自ら卑<sub>レ</sub>しむの業なりとなり。

るは我が懷中の珠を忘れて河原の砂中に  
金を覓<sub>レ</sub>むるが如<sub>レ</sub>き愚なる業なりと歌ひた  
るなり。

〔いかつげ〕 嚴めしく強<sub>レ</sub>げなる義。



意 歴史の神を鉛の像に喩へ、歴史家を  
児童に喩へて、歴史の神は取るに足らざ  
るものにて史家の意の儘に作らるゝこと  
は、即ち鉛の像の、里の童等に自在に打  
ち成さるゝが如しとなり。

第二節 百一頁

〔犠牲〕 生贄の義、鳥獸魚などを生けな  
がら牲として神に供ふるなり。(宇治拾、

第十五章 百二頁

意 されど詩の神は歴史の神の如き益な  
きものにあらで、親が子を思ふ如く、詩の

第十六章 百四頁

四ノ十二) いけにへといふ事に猪をいけ  
ながらおろしけるを見て。(同、十ノ七年  
ごとの祭に必ずいけにへを奉る人の娘の  
形よく髪長く云々。又本邦にては賀茂に  
ては鯉、熊野にては鯛、春日にてはかけ  
物、嚴嶋にてはうろくづの類を——とす。  
意 斯の如き歴史の偶像を奉じて何かせ  
ん、實に崇め尊むに足らざるなりと。

神は世の人々を護ひ玉ふと歌ひしなり。

第一節 百五頁

〔阿波の鳴門〕 大鳴門小鳴門といふ阿波  
と淡路との間の海なり。(西行)世の中を  
渡りくらべて今ぞしるあはの鳴門はなみ  
風もなし

〔潮さる〕 潮騒の轉。或はさるは先の義  
にして、潮の満ち來る時、浪の高く騒ぎ  
起つところをいふ。(萬葉、一ノ二十)しほ  
さるにいらこのしまべこぐふねにいもの  
るらんかあらししまわを。

意 此處に至り一變して、人世の行路の  
難さを、阿波の鳴門の逆捲く波の中を小  
舟にて渡るが如しと譬へしなり。

第二節 百五頁

出廬抄註

〔閭に倚つて待つ〕 閭は里の門也。(戰國

策) 王孫買母曰、汝朝出而晚來、則吾倚  
門而望、暮出而不還、則吾倚閭而望。  
意 人世の行路を沙漠の旅に譬へ、人生  
六十年の旅の末、漸く或處に辿り着くと  
も、其處には何物もなくして、たゞく  
生れぬ先、即ち旅立たぬ前の故郷の、い  
と悲しく淋しきところに歸るに過ぎざら  
んとなり。

第三節 百七頁

意 我が身の世に在るや、我既に鳴門の  
船の、終極の碇泊地を求めかねたるが如  
く、既にいたづらに疲れたりとなり。

第四節 百七頁



意 我の世に在るや、又既に沙漠の旅行に疲れて、甲斐無き夢の痕を幾度と無く思ひ忍びて泣けりとなり。

第五節 百八頁

第十七章

百九頁

〔他し意〕 誠なくして他に移る心 (古東歌) 君をおきてあだし心をわがもたば末のまつ山波もこえなん。

第十八章

百十頁

第一節 百十頁

〔真紅の躑躅花云云〕 火の爐中に燃ゆること躑躅花の日を受けて水に映るが如し

方言なり。(芭蕉) 香に匂へ——ほる岡の梅の花。

第三節 百十一頁

〔二百の骨〕 人體の骨の概數なり。

意 石炭は燃ゆる時に其の價値あり、人は人の心の活動する時に人の價値あり、故に人の一代は石炭の燃ゆるが如く熾んに活動せよと歌ひしなり。

第四節 百十二頁

意 火の燃ゆればこそ石炭は價値あり、

第十九章

百十四頁

第一節 百十四頁

〔北斗〕 破軍星、天の北極に近き星の名、

出廬抄註

意 今は、我、人世は畢竟夢の覺むる時に聲を立つるが如き悲しきものなりと知りたりとなり。

五二

意 人世の悲しきことを知り盡して、初めて我が歌の御神の頼むべきを知り、之をいつき祭るとなり。

となり。

第二節 百十一頁

〔石炭〕 石炭、泥炭の一名、伊賀伊勢の

我が心の働けばこそ身は價値のあるものなるを、反對に思ひ違へて、石炭の中に火の價値あり、身の中に我ありと思へるは愚なる業なりけりとなり。

第五節 百十三頁

意 全章の意、肉身を尊んで心を卑むの誤謬なるを云ひ、肉身を忘れ、物質を輕んじ、實在を卑くし、空想を尊ぶべきを云へるなり。

七星あり、其第七を搖光といふ。(詩) 維北有斗、不可三以挹酒漿(星經)——星、

五三



謂之七政、天之諸候、亦謂帝車、魁四星、爲璇璣、杓三星、爲玉衡、齊七政、斗爲二人君號令之主。

〔金翅鳥王〕 佛經に出てたる大鳥にして身の高さ四十里、衣の廣さ八十里、長四十里、海中に飛び下り、翅を以て水を搏てば、水即ち兩披して深さ二百由旬、龍を取り、意に隨つて之を食ふと。又この鳥王は名を正音といふ、日に一の龍王と五百の小龍とを食ひ壽八千歳なりと。〔天の河〕 白く光りて川の如く帶の如く長く大空に亙りて見ゆ、無數の星の密集

第二十章 百十五頁

したるものなりといふ。(伊勢物語) かりくらしたなばたつめに宿からん天のかはらに我はきにけり。

〔颯風〕 旋風の極めて大きく、極めて暴きもの、稱

第二節 百十五頁

意 第一、第二節は、現身と現世とは如何やうにてもまよ、我はた心を重ねじ空想を重ねじ、歌を重ねせん。全章の意、みづから詩の徒たらんことを誓へるなり。

第一節 百十五頁

意 富の尊ぶに足ざるを歌ひたるなり。

第二節 百十六頁

〔あざれし〕 腐ること、饑ゆること。(仁徳紀、四) 苞苴鮫二於往還。意 富を腐敗したる肉に譬へて、富の招き得るものは唯蒼蠅の如き人と虱の如き人とのみなりといへるなり。

第三節 百十七頁

〔投げの情を賣る里〕 薄き情といふ義にて、遊廓をいへるなり。(風雅戀四、覺譽法親王) かはりたつ心と見ゆる其上のなげのなさけよよしやいつまで。〔若松のお千代〕 天明前後の人、狂歌作

出廬抄註

者部類に、別號は松花樓、四谷新宿下町の住、家號新若松といふ。娼家の女主人にして狂歌を善くせり。

〔自在鍵〕 爐または竈の上に、竹筒に鉤ある木を通し、上げ下げとも意の如くならしむるやうの仕掛けをなして、鍋、茶釜などを吊るすものなり。

意 若松のお千代が歌にいへる如く、汗鍋一つにて埒明く庵を、富貴自在と観ずるもまた可なり。浮世の富は戀ふに足らずとなり。

第四節 百十八頁

〔山車〕 祭禮のとき曳きまはす飾物、だんじり、やたい、京都にて山鉦ともいふ。



いろ／＼の作り物をなし、車に載せ牛な  
どに曳かせて囃し立て行く。  
意 榮華に世を経る人を山車の牛に譬へ  
たるなり。

第五節 百十九頁

意 田舎の牛の樂しげなるさまを云へる  
なり。

第六節 百十九頁

〔田夫〕 農夫をいふ。(夫、廿三、素覺法  
師) 横のしまさらしかけたる手作りに見  
えまがふまでさざむれぬる。亦靈異記

第二十一章 百二十二頁

〔太莞〕 古名おほる、蘭の一種。水澤中

に農夫を、たつくるをとよめり。  
意 第五、第六節は山車の牛となりて他  
に玩ばれんよりは、心長閑に山田鋤く牛  
となりて、我が性を遂げんこそ望みなれ  
と歌ひたるなり。

第七節 百二十一頁

〔雲の梯〕 雲の浮梯に同じ。

意 浮世の富を戀はず、我れ詩に富まば  
足れり、何んぞ身の貧を憂んやと歌ひた  
るなり。  
全章の意、富を斥けて詩を尙べるなり。

に生じ、綠幹一根より叢生し、長さ丈餘、

葉圓し、夏の末、梢より稍下りて褐色の  
花を開く、秋葉を刈り、編みて蓆とす。

〔琅玕〕 青き玉質の石、太莞の青々と立  
ちたるを形容したる也。(李白詩) 鳳饑不

レ啄粟、所食惟琅玕(白居易新栽竹詩)

拂肩搖翡翠、腕手弄三一一。

〔太鼓蟲〕 やまめに同じ。又みづむし、

みづばち、えびむし。蜻蛉の卵の水中に  
化生せるもの、形略ほかまきりに似て灰

黒色なり。翅なくして六脚あり、細長く  
二脚吻につきて手の如く、毎に太鼓を  
うつが如き状をなす、よつて太鼓蟲の名  
あり。夏の初め水を出で、水邊の草木に  
上り、背裂けて、蜻蛉となり、身は蛻と

なる。

〔生絹〕 練らぬ絹布の名、軽く薄くして  
紗の如きもの。

〔水蟲〕 太鼓蟲に同じ。

意 蜻蛉は、我が昨日の水蟲の名を戀は  
ずして却つて厭ふと取り倣して、次の節  
に、心ある士の世にあるや昨日の我の名  
を戀はずと云はんとするが爲に其の地を  
なせるなり。

第二節 百二十三頁

〔日々に新〕 (湯之盤銘) 苟日新日々新又

日新。  
〔水蟲〕 太鼓蟲に同じ。  
意 眞に日に進んで止まざるの士は昨日



の我を稱美さるゝを愧づること、猶天飛  
ぶ蜻蛉の舊身を戀はずして、却つて水蠶  
の名を云はるゝを愧づるが如くなるべし  
となり。

第三節 百二十四頁

〔あきつ蟲〕 蜻蛉に同じ、秋に至り種類  
多く出るものなれば——の名ありとぞ。

〔水蠶〕 太鼓蠶に同じ。

第四節 百二十五頁

意 第三、第四節は名譽を水蠶の壳、蛇  
の脱壳等の見苦しきに譬へ、むしろ其等  
の者、水に流し風に任せて捨つべきなり  
となり。

第五節 百二十六頁

意 名譽は云ふに足らず、詩た愛すべ  
し、詩に興ぜんには醉狂して死するも亦  
可なりとなり。

第七節 百二十七頁

〔鯨魚に騎つて〕（宋無李翰林墓詩）一騎  
紫鯨去、空掩謝山瑩、落月今誰弔、長庚  
夜自明、乾坤沈秀氣、江水帶哀聲、天上  
多官府、文章不可輕、又（容齋隨筆）世  
俗多言、李太白在當塗采石、因醉泛舟於  
江、見月影、俯而取之、遂溺死、故其地  
有捉月臺、又（梅聖俞詩）采石月下逢謫  
仙、夜披錦袍坐釣船、醉中愛月江底  
懸、以手弄月身翻然、不應暴落飢蛟涎、  
便當騎鯨上青天、又（吳山民曰）子美天

〔號氏〕 楊貴妃之姊、並承君恩、出入宮  
掖、（杜甫詩、或曰張祐詩）號國夫人承主  
恩、平明騎馬入金門、却嫌脂粉汚顏  
色、淡掃娥眉朝至尊。

第六節 百二十六頁

〔一斗の酒〕〔百篇の詩〕（杜甫飲中八仙  
歌）李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天  
子呼來不上船、自稱臣是酒中仙。  
〔詩仙〕李白を指せるなり、太白醉死の  
事次節の註に明らかなり。

末懷李白詩、其尾聯云、應共冤魂一語、  
投詩弔汨羅、同上篇云、水深波浪濶、無  
使蛟龍得、此又云、江湖多風波、舟楫  
恐失墜、疑是時必有妄傳、李太白死者、  
故子美云云、後世遂有沈江騎鯨之說、蓋  
因公詩、附會耳、太白卒于當塗李陽冰  
家、葬于謝家青山、二史可考、安有沈江  
事乎。

〔天に上らん詩思〕（彩毫記）酒渴思吞  
海、詩狂欲上天、猶前條を見よ。  
意 李太白のことを擧げて、歌ゆゑなら  
ば叶はぬ戀に其の戀人と我とを連ねて無  
實の浮名を云はるゝもせめてもの心遣り  
となりて却つて嬉しき思あるが如く、歌



を思ひて哥拙くして、その爲に譽を傷け、  
無き名云はるゝも却つて嬉しかるべしと

第二十二章 百二十八頁

第一節 百二十八頁

〔雪山の牛〕（後漢書班超傳註）西域有  
白山、通歲有雪、亦名——（大佛頂首楞  
嚴經）佛告阿難、若末世人願立道場、先  
取雪山大力白牛、食其山中肥膩香草、此  
牛惟飲雪山清水、其糞微細、可取其糞  
和合梅檀、以泥其地、若非雪山、其牛臭  
穢不堪塗地。——は最も清淨なる牛と  
して知られたるものゆゑ、此處に取り出  
されたるなるべし。

なり。  
六〇

全章の意 名譽は悪しきものならずとも  
又然のみ悦ぶべきものにもあらず、むし  
る名を傷つくと詩に興せんといへるな  
り。

〔天の漿〕 天上の飲料との意、人間のも  
のにあらずと賞せる詞なり。（韓愈詩）刺  
手拔鯨牙、舉瓢酌天漿。

第二節 百二十九頁

〔婆羅門〕 梵語、沒羅憾麼爛の約、淨行  
と譯す。天竺四姓の一、貴族の姓にて國

民四階級の最上たり。又宗門の名ともす。  
即ち梵天王の裔にして、世々其法を承け  
傳ふと稱す。其の宗は佛教よりも甚だ古  
く且つ盛にて、——の慣例、若き時は學  
び、壯なる時は化導し、老いてはまた山  
に入つて道の深奥のところを思惟研究す  
る也。

第三節 百三十頁

〔金星〕（和名抄）長庚、大白星なり。金星  
を暮方の天に稱する言葉にて、即ち宵の  
明星の義。（萬、十、廿六）ゆふづゝも通  
ふ天路をいつまでかあふぎて待たむ月人  
男。  
〔體え〕 酸くなる義、飲食物の暑さに傷  
出廬抄註

められて腐敗して酸味を生ずるをいふ。

第四節 百三十一頁

意 第一、第二、第三、第四節は、雪山  
の牛は清く、乳は良く、之を搬ぶ女は美  
しく、之を盛る瓶は汚無く、之を置ける  
窟は塵無けれども、牛乳の中に水分われ  
ば終に腐敗したり、といひて、後段、詩  
の中の戀の方、實際の戀よりも尊ぶべき  
由を云ふの地をなせるなり。

第六節 百三十二頁

意 水無き乳汁もなく、慾を離れたる戀  
もなき道理なれど、乳は古びず體えざる  
に價値あり、戀は幼く清らなる時愛すべ  
しとなり。



第七節 百三十二頁

〔酥〕 牛羊の乳を煎煉して製したるもの  
陸祖切音蘇(玉篇)酪也(韻會)酪屬、牛羊  
乳爲之、牛酥差勝(耀仙神隱書)造法、以  
乳入釜、煎二三沸、傾入三盆內、冷定、待  
面結皮、取皮再煎、油出去滓、入鍋內、  
即成酥油。

〔甘露〕 露の甘味あるものとして、古より  
仁政の天地に感應して降る瑞祥のもの  
す。されどこれは誤れり。始めて天武紀に  
見ゆ。本草綱目に云く、一は瑞に非ず、  
乃ち草木の將に枯れんとするや、精華頓  
に外に發す、これを雀錫といふと見えたり。  
夏、梅杏等の葉の繁茂するところに

ありまきを生子、其蟲味甘きが故に、其  
下の葉に甘き液の滴るものにて、即ち其  
蟲の尿なり。(張說詩)一垂天酒。  
此處にては酥の味を形容して、仙家の花  
の露の甘きが如しと云ひたるまてなり。

第八節 百三十三頁

〔醍醐〕 酥を精製して得る液、味ひ甚だ  
甘美にて病を癒すといふ。佛說五味の喻、  
を以て最上のものとする也。

〔玉髓〕 玉の髓の義。滑る舌の上以  
下五句は醍醐の舌觸りも好く、香も好く、  
口に融け易くして、人の煩熱を去るを賞  
美せるなり。

〔五臟〕 漢方醫の説に心、肺、肝、腎、

脾、を一といふ。

意 第七、第八節は、乳より酥は貴く、

酥より醍醐は貴しといひて、饒え易き乳  
の漸く醇化する状を詠じたる也。酥を煉  
れば醍醐となれるが、醍醐となりて乳は  
貴く、詩となりて戀ひは貴し、饒え易き  
乳汁と、詩にならざる戀ひとは價値の更  
に無きものなりと。

第二十三章 百三十五頁

第一節 百三十五頁

〔貧は士の常〕 列子の語なり。  
〔布子一貫〕 綿布の衣の綿を入れたるも  
の、一貫は一枚といふが如し。

出廬抄註

第九節 百三十四頁

意 醍醐は貴し、乳汁は貴ぶに足らず、  
戀の詩は貴し、臭骸の戀は貴ぶに足らず。  
現實の戀は水ある乳汁の如くならんのみ  
となり。

全章の意は、肉身の戀貴ぶに足らず、詩  
中の戀を我むしる貴んで、之に溺れんと  
なり。

〔さびら〕 麻布の晒さぬもの、近江犬上

郡高宮の産、苧麻にて製す、高宮布とも  
いふ。

第二節 百三十六頁



〔雑炊〕 大根、葱など刻み雑へて味噌汁にて煮たる粥。

〔手とり鍋〕 提梁のある鍋、貧家の趣きなり。(新撰狂歌集、述懐、貧家の瘦人)

手とり鍋にて雑炊を炊きて食ふとして、とりめよ、おのれは口が、さし出たぞ、みそうづたくと、人にかたるな。みそうづは即ち雑炊の義なり。

第二十四章

百三十七頁

〔木槿〕 古名木蓮、花、蓮に似たればいふ。灌木、高さ丈餘に及び枝條繁茂す、多く籬となす。夏秋の間に枝の梢に五瓣の花を開く、朝に開きて夕に萎む。故に

てきばちすといふ。(芭蕉)道ばたの木槿は馬に食はれけり。

意 目に立ちて終に馬に食はる、木槿を深山の樹は傷み悲むが如く、我なまじひに名譽あるもの、却つて不幸を招くこと多きを知りて、名譽あらんことを願はずとなり。

第二節 百三十七頁

意 深山の樹の名無く譽無くして却つて

第二十五章

百三十九頁

〔耳聾ひて後、樂曲を作す〕 音樂の聖、ベートーベンは千七百七十年奧太利のボンに生れ、千八百二十七年納也府に死

出廬抄註

六四

〔柚味噌〕 ゆみそ、味噌に柚子の醋を和して、砂糖胡麻などを加へて摺り交ぜたるもの、柚子の中子を脱き去りて、其中に盛る。——雑炊等は儉素自から居るの趣きなり。

意 第二十三章は、第二十章に照應して、富を願はず貧に甘んじて、晏然として我廬の中にある趣きをいへるなり。

古はあさがほの名もありたり。またもくげともいふ。常總にてはきはち又はもつさといふきはちす木槿の略なり、九州にてぼてん花奥州にてかきつばき、南部に

心ゆたかに年を経るを讃せるなり。

第三節 百三十八頁

意 廬中の人の名譽を思ふこともなく心しづかに樂み暮せるさまを説けるなり。

第二十四章は、第二十一章に照應して、名譽を捨て、人に見らるゝこともなく、静に在る我が悠然として廬に在る心の長閑にして樂しきを云へるなり。

す。八歳既に音樂の才を顯したりといふ。音樂の大家として泰山北斗と仰がるゝこと、猶詩に於ける李杜、シエクスピヤの

六五



如し。三十歳頃より耳おひくく、に悪く  
りて、終に全く聾となりしが。聾後猶能  
く多くの不朽の曲を作りたり。ヲパス、  
ミサソレムニス、シンフオニー等尤も其  
の有名なる曲なり。  
〔あこがれて〕 あくがれに同じ、うかれ  
さまよふ意。(後拾、神祇、和泉式部)物お  
もへばさはのほたるもわがみよりあくが  
れいづる玉かとぞ見る。

### 第二十六章

百三十九頁

意 第二十三、二十四、二十五の章に、  
富を棄て、名を捨て、戀をも實世界の戀  
は捨つることを云へるが、さて一切のも

意 第二十二章に應じて、身の慾を雜ふ  
る戀を斥け、詩の戀を悦ぶといへるなり。  
ベートーベンは耳聾ひて後も曲を作れる  
也、されど耳聾ひたればもとより我が作  
れる曲を我が耳に聞きて快感を得しには  
あらず、たゞ樂の神趣を悦び樂みしのみ  
ならん。我も亦願はくは其の如くに肉慾  
には何等の關係無き詩の中の戀にのみ樂  
み悦ばんとなり。

のを棄てはて、思ふところはたゞ詩のみ  
なり、となり。

### 第二十七章

百四十頁

#### 第一節

百四十頁

〔まなご石〕 まなごは砂の細かきものを  
云ひ、又まなご路といふ語は萬葉などに  
も見えて、細砂の路をいふなれど、こゝ  
にまなご石とあるは細砂の集まりて石と  
なれるものをいふにはあらず、砂利なん  
どいふ小き圓き石の義にして、田舎詞な  
りといふ。

#### 第二節

百四十頁

〔浦々〕 露多貌、又作團。(杜甫詩)玉露  
薄二清影。  
〔眞珠ころがる〕 蓮の葉の上の露を形容

出廬抄註

したるなり。あこや貝其の他より出づ。

意 第一、二節は、清みたる露の珠には、  
自から月の影の來り宿るといふことを叙  
し、後に雜念を棄て思を澄ませば詩はお  
のづから來ると云はんがために地を作れ  
る也。

#### 第三節

百四十一頁

〔戀鏡〕 婦人の粧鏡なり。(駱賓王詩)一  
朝々減三容色(李商隱詩)一佳人舊會稀。  
意 美しからぬ女の容を粧ふごとに惱み  
て、郎を笑ます貌なきを愧づることく、  
我は詩を思ふごとに、詩神を笑ます才無



きを愧づとなり。

第四節 百四十二頁

意 女の貌なきを羞づるは憐れとも美しとも見るべし。されば我が才無きを愧づるを詩神も憐れとや見るべしとなり。

第六節 百四十三頁

意 第五、第六節は、石上の露には或時

第二十八章 百四十四頁

第一節 百四十四頁

〔晨鐘〕 晨を報ずる鐘なり。

第二節 百四十五頁

第二十九章 百四十五頁

第一節 百四十五頁

意 佛陀の教は智の教にして、冷やかなる事山の井の水の如くなり、我は浮世の慾には身を委せぬこと猶佛陀の教を奉ずるもの、如くなれど、さりとして冷やかなる能はず、我は温かき情の徒なればなり、

第三十章 百四十七頁

意 詩の國の貴きことを敍して、遙に第一篇の第二章第三章第四章第五章に照應

第三十一章 百四十八頁

〔梵王宮〕 印度の古説なる婆羅賀磨天即ち梵天王の宮殿。梵天王は一切の物を生

出廬抄註

終に月の影映れり、それと同じく我が心にも或時たましく詩神の月の影さして、自ら言ふべからざる悦びを感じたることありしとなり。

全章の意は、前の章を承けて、詩を思ひて終に詩の悦びを得たりといへるなり。

意 一章の意、人世の花も、戀も、酒も

悉く厭ふべく、唯詩のみ空想のみ尊ぶべしとなり。

となり。

第二節 百四十六頁

意 第二十九章は、我智を以て全く人の世を思ひ捨つるにはあらず、佛徒たるにはあらず、詩の徒たるのみなりとなり。

し、勇士も美人も常に存する詩國の麗はしき由を歌ひたるなり。

ずる力ある圓滿具足のものなり。雌雄相呼ぶ以下四句は——の春の色を形容した



るなり。

〔六慾〕 禪波羅蜜次第法門に出づる六慾は一色欲、二形貌欲、三威儀姿態欲、四言語音聲欲、五細滑欲、六人相欲なれど、茲にいふは、眼耳鼻舌身の五根に對する色欲、聲欲、香欲、味欲、觸欲、以上天台四教儀に出でたるものに、意の満足を得んとする欲を加へたる六根に對する慾なりとぞ。

〔木精〕 (和名、二の十一) 樹神、文選蕪城賦云、木魅山鬼、今按、木魅即樹神也(源蓬生、四) こだまなどけしからぬ物ども所をえてやうく、かたちをあらはし(同、手習、六) 鬼か神か狐かこだまか。とあれど

わたりの説なり。こゝに山姥とあるは、天地流行の氣といふものを、人に擬へて山姥といへりと見るべし、謠曲——の意

第三十二章 百五十頁

意 終に五十年の一生を單に詩の神に仕へんことを思ひ、愈々詩を喜ぶに至りし

第三十三章 百五十一頁

第一節 百五十一頁

第二節 百五十二頁

〔詩卷長く留めん、天地の間〕 (杜甫、送孔巢父謝病歸游於江東兼呈李白詩) 巢父掉頭不肯住、東將入海隨煙霧、

出廬抄註

も、又、顯昭は山彦の事といへり。こゝにはそれに從ふべし、山彦は山の神。萬葉集には山響をよめり。(萬、九ノ廿四) あすのよひあはざらめやもあし引の山彦どよめよひたてなくも(古、戀一) 打わびてよばん聲に山ひこのこたへぬ山はあらじとそおもふ。反響を人に擬へて、さも不思議なる妖精などの如くに云ひ做し、空想の郷にてはかゝる木精が歌ふところの歌も聞かんとすれば聞きて知るべしといへるなり。

〔山姥〕 男に山男、女に山姥、深山に棲む怪物、或は獺といひて猴の極めて老いたるもの、稱ならんかともいふは、一ト

に本けづけるなるべし。意 更に空想のおもしろく、たのもしきことを繰返して歌ひたるなり。

ことを歌ひたるなり。

詩卷長留天地間、釣竿欲拂珊瑚樹、深山大澤龍蛇遠、春寒野陰風景暮、蓬萊織女回雲車、指點虛無是征路、自是君身有仙骨、世人那得知其故、惜君只欲苦死留、富貴何如草頭露、蔡候靜者意有餘、



清夜置酒臨前除、罷琴惆悵月照席、幾歲寄我空中書、南尋禹穴見李白、道甫問訊今何如、

第三節 百五十二頁

意 第三十三章は廬の中の人の情と、廬

### 第三編

第一章 百五十三頁

第一節 百五十三頁

〔春雷〕——は春の雷にて、多くは忽として起るものなり。故にいふ。  
意 春雷雄雉は忽然として動き起つものなれば、俄に物の音人の聲の起るに擬へ

〔男兒寧ろ當に格闘して死すべし〕（晉陳記室集飲馬長城窟行）飲馬長城窟、水寒傷馬骨、往謂長城吏、慎莫稽留太原卒、官作自有程、舉築譖汝聲、男兒寧當格闘死、何能怫鬱築長城、長城何連々、連々三千里、邊城多健少、內舍多寡婦、作書與內舍、使嫁莫留往、善侍新姑嫜、時々念我故、夫子報書往邊地、君今出語

第二章 百五十五頁

〔金桂〕香の名。  
意 前章を承けて、されど我はた静に

第三章 百五十六頁

出廬抄註

七二  
の前の景色の樂しさを敍して、人や、老いて心いよく牢からんとするさまを云ひ、第一編第二編を收結し、第三編第四編を起すの地となせるなり。

たるなり。

第二節 百五十三頁

意 物の音を何ぞといへば、戰馬軍器のひしめく音なりとなり。

第三節 百五十四頁

一何鄙、身在禍難中、何爲稽留他家子、生男慎莫舉、生女哺用脯、君獨不見長城下、死人骸骨相撐拄、結髮行事君、慊々心意關、明知邊地苦、賤妾何能久自全、意 人聲を何ぞといへば、平和の讎を西征して打懲すべしと呼べるとなり。  
全章の意は廬中は静なれども、忽然として國家に事起りたりとなり。

香を焚きて詩をおもふのみなりとなり。



第二節 百五十七頁

〔水棹〕 船を漕ぐ竿。(拾、雜下、菅原道雅女) みつせ川わたるみさをもなかりけり  
なに、衣をぬぎてかへらむ。

意 第一第二節は、廬前の景に寄せて、川にいろ／＼の船あり、船にいろ／＼の人ありといへる、暗に川を時間にとへ、船を世に喩へたるなり。

第三節 百五十七頁

意 其の川の船に歌の聲するとなり、第四、五節と共に、次の第四章を發せんとするなり。

第四節 百五十七頁

〔毛苴〕 一方へ菅を多く編み餘して、毛皮の如く、篋の如くならしめ、雨路を凌ぐに用うるもの(初版筈に作るもの誤)。

〔洞の間〕 船には船梁あつて區劃す。――は船の間と、艫の間との間の室の稱なり。

第五節 百五十八頁

意 第三章は一轉して、川を下る船のいろ／＼の、その苦の蔭より、一船客の歌の聲の漏れ聞えて廬前を過ぐるを云ひたり。こは勿論作意にして、前章は對岸の聲、これは川中の船の歌と、やうやくにして我に近づけ來れる也。

第四章 百五十九頁

第一節 百五十九頁

〔孤雲流れて云々〕 天より風下す前にははなれ雲先づ飛ぶものなり。これを「ふん出し雲」と俗には稱ふるなり。  
〔地より風の立つ云々〕 氣壓の模様にて空には風見えぬに地に貼きて風起る時は小草戦ぐなり。山居するものは能く此事を知る。

〔方寸〕 胸の中なり。(錢起詩) 雲天有三飛

翼、一、時、瑤華。

〔劫運の風〕 猶時運の風といふが如し。劫詳しくは劫籤といふ、大論に秦には分

別時節といふ。運は命運なり。(隋書經籍志) 元始天尊所說之經、亦稟三元一之氣、自然而有、非所造爲、天地不壞、則蘊而莫傳、一若開、其文自見。

意 第四章は即ち船客の歌にて、此の節は、孤雲小草の動きは風の知らせなり、それと同じく天地の靈を方寸に結べる人の心の動きは何かの知らせならざらんや、然り、却運の風の吹かんとする知らせなりとなり。

第二節 百六十頁

〔蓍々芊々〕 草木繁茂の貌。(說文) 芊々



た自ら衛る能はずとなり。

第四節 百六十一頁

〔山岨の云々〕 山の岨陰にて眞葛などの

絡みかゝれるは賤が家の景色なり。

意 國家も富豪も劫運の風には敵しがた

ければ、まして貧賤無力の者の如きは、

其の據るところを奪はれて悲み泣くとな

り。

第五節 百六十二頁

〔二十八宿〕 支那の天文學にて、周天の

星宿を二十八に分ちて稱する語、天の四

方に各七つ宛あり。東方、角、亢、氐、

房、心、尾、箕。北方、斗、牛、女、虛、

危、室、壁。西方、奎、婁、胃、昂、畢、

草盛貌(博雅)茂也(列子)齊景公游于牛

山、北臨其國域、曰、美哉國乎、鬱々芊々、

(高適詩)登レ高見三百里、桑野鬱一。

意 劫運即ち時運の風に吹かれては、國

家も敵する能はずとなり。

第三節 百六十頁

〔寶鐸〕 風鈴に似て甚だ大いなるもの、

堂塔の簷などに懸けて飾となす。(李徳林

塔銘)寶鐸交音、梵聲凝韻。

〔雕梁〕 雕刻したる梁なり。(杜詩)日月

近一。

〔翠帳〕 翠の帳なり。(謝朓擬風賦)開一

一之影藹、響三行珮之輕鳴。

意 此の劫運の風にあひては。富貴もま

青、參、南方、井、鬼、柳、星、張、翼、

軫。

意 劫運の風狂へば、天地動亂するとな

り。

第六節 百六十二頁

意 我が邦の民、何となく不安を感じて、

天の孤雲の如く、地の小草の如くに、其

の心動き居たりしが、果して劫運の風は

終に來れりとなり。

第七節 百六十三頁

意 山の花、谷の花、花はその生ふると

ころ異なれど、皆た日のめぐみに浴し

て、譯もなく咲き匂ふは、花の欺むかぬ

性なりといひて、次節のために喩をなせ

出廬抄註

るなり。

第八節 百六十四頁

意 人種は異れど、民は皆正義に依頼し

て、唯譯もなく生きて楽しく性を遂げん

と願ふのみなりと歌ひしなり。第七、第

八節の言外に、花は風を願はず、民は戰

を悦ぶものならずとの意を含めるは云ふ

までも無し。

第九節 百六十五頁

〔蠶〕 家に養ふよりして常にかひこ、又

はかふこといひ、桑にて養ふゆる桑兒と

もいふ。(伊勢物語)なか／＼に戀にしな

ずばくはここにぞなるべかりける玉の緒ば

かり。(萬、十三、廿七)なか／＼に人とあ



らずばくはこにもならましものを玉の緒ばかり。  
意 蠶を養ふものは蠶をおもうて饑ゑしめずとなり。

第十節 百六十五頁

〔雪を愁ひて〕 雪烈しければ桑は其の根傷むゆゑなり。

〔春の朝は霜を悲む〕 桑は春發芽の後霜にあへば、殊に甚だしく傷み弱るものゆゑ也。

意 桑を植うるもの桑をあはれみて培ふとなり。

第十一節 百六十六頁

〔はごくみ〕 はぐ、みに同じ、羽含むの

義にて、親鳥の羽をもておほひつゝみ雛を養ひ育つるより出でたる詞なり。(萬、九、卅二)旅人のやどりせん野に霜降らばわが子はぐ、め天のつるむら。  
意 人の蠶を飼ひ、桑をあはれむと同じく、人の君は必ず民を思ひ、國を愛みたまふべしと歌ひしなり。

第十二節 百六十六頁

〔どよみ〕 轟きひく義、鳴り渡る義。

(六帖、三)岩瀧に磯さへとよむうふ川のあかたうたひて吾思はなくに、(古、戀二)秋なれば山とよむまでなく鹿にわれおとらめやひとりぬる夜は。

意 然も劫運の風吹けば、山の花も、谷

の花も皆飛ぶとなり。

第十三節 百六十七頁

〔夫婦〕 いもは妻、せは夫の義なり。(源、末摘、卅六)たはふれ給ふさまいとをかしきいもせと見えたり。

〔修羅の衢〕 戦場の義なり。修羅詳しくは阿修羅王といふ、佛經に出づ、其性憤怒闘諍す、力強くして梵天帝釋と能く闘ふ。

意 民相争ふ心は無けれども、劫運の風吹けば、彼此共に競ひ立ちて、家庭の樂しさをも打忘れて戰場に馳せ向ふとなり。

第十四節 百六十八頁

〔すめらみこと〕 天皇を稱し奉る言葉、

出廬抄註

天が下を統る尊の義。すべらき、すめらぎ、すめるぎ、すべるぎ、すめらぎみ、(萬、十八ノ廿二)すめるぎのみよさかえんと東なるみちのく山にこかね花さく。

〔劔櫛〕 劔の柄の義、古事記に手上と見ゆ。亦たかひ、焼太刀の手穎押しねり、白檀弓、鞆取り負ひて。

意 賤の少女も蠶をおもふ情あり、賤の男も桑を培ふ道を知り、人の君はもとよ

り民をあはれみ玉へども、劫運の風の吹く時は又如何とも仕難く其の心も空になりゆきて、已むを得ず劔を執り甲を被りて奮然として立ち玉ふ。皆是劫運の風の然らしむるところなりと。



第十五節 百七十一頁

〔金鼓〕 戰陣に用うる陣鐘、陣太鼓、（吳子）凡戰之法、晝以三旌旗、夜以三一筩笛爲節。

第十六節 百七十頁

〔地震〕 地震なり。（武烈紀、二）おみのこのやぶのしばがきしたどよみなるがよりこばやれんしばがき。

意 雷は陰陽の氣激して起り、地震は鬱氣悶えて起る、天地の事は誰が爲すとも云ひ難く、人間の事もまた必ずしも人間の爲するわざにあらざれば、花は嵐を願はず民は戰亂をよろこばず、人君は戰爭を悦びたまはねども、又已むを得ず

して起るのみ、實に如何とも仕がたしと歎ぜるなり。

第十七節 百七十一頁

〔浦安の國云々〕 浦安の義にて我が日本國をほめていへる詞、神武紀に見ゆ。浦安からずは、國內穩やかならざるをさへるなり。

〔大八洲〕 我が日本國の異名、日本紀――と見えたり。即ち大倭豊秋津洲（中州）

伊豫（四國）淡路、筑紫、壹岐、對馬、隱岐、佐渡の八洲を合せ稱するなり。――人島を出でたりは、大陸へ出征の事を云へるなり。

第十八節 百七十二頁

まぬものはなしと歌ひたる也。

第二十一節 百七十五頁

〔須陀〕 賤しき民の義、（翻譯名義集）梵語、首陀羅、即農人種也。（寶物集、高岳親王）いふならくならくの底に入りぬればせつりも――もかはらざりけり。

〔刹利〕 尊き族の義、（翻譯名義集）梵語、刹帝利、華言田主、爲三世間大地之主、即王種也。

意 兵火起れば憂へざる人はなしと也。

第二十二節 百七十六頁

意 一轉して、吹かてやまざる劫運の風ならば吹くとも何を厭はん、お、吹くことよと歌ひたるなり。

意 時運の然らしむるところ、昨日は人々ひそかに戰爭の避け難きを思ひて疑懼したりしが、終に今日は旗を滿洲の原に進めたりといへるなり。

第十八節の二 百七十三頁

意 前節に同じ。

第十九節 百七十三頁

〔烏雲〕 黒き雲なり。  
〔銀箭〕 夕立の降れる趣きを形容したる也。

第二十節 百七十四頁

意 第十九、第二十節は、夕立降りて濡れざる草のあらぬが如く、劫運の風の吹く時は、有情、非情の別ちなく天下に悲



〔戕阿〕（倭名抄、十一、四）所以繫舟、即ち舟を繋ぐ杖、又はもやひぐひ、（萬、七、十七）舟はて、可志ふりたて、いほりせんなこえの濱べすぎがてぬかも。

〔假泊〕假そめに寝ること、かりまくら、かりぶし、うた、ね、（千載、戀三）難波江のわしのかりねの一夜ゆゑ身をつくしてや戀わたるべき。

〔苦〕菅茅などにて編み、屋を被ひ雨露を防ぐに用う。（月清集）あきの夜のあれもふかき磯寐かな苦もる雨の音ばかりして。

〔未だ雲中の人ならで云々〕列仙傳云、

河上翁、漢文帝時、結草庵於河上。帝讀老子、有不解、遣使問之。公曰、道貴、德貴、非可遙問。幸幸其庵。問曰、普天之下、莫非王臣。不能自屈、無乃高乎。公即坐躍冉冉在空。去地數丈。曰、余、上不至天、中不至人、下不至地、何臣民之有。

意 春水に魚を釣り秋江に酒を酌みて世を忘れたる我が如き舟夫も、未だ仙人にもあらねば國に事ある時、猶國の爲めに力を盡さんと思ふと歌ひたる也。

第二十四節 百七十七頁

〔天鵬〕鵬はおほとり、支那にて想像の大鳥なり。鯤といふ大魚の化して鳥とな

れるものといふ。（莊子逍遙遊）鯨之大不知其幾千里也化而爲鳥其名爲鵬、中畧、鵬之徙於南溟水擊三千里、搏扶搖而上三九萬里。

〔扶搖の風〕下より吹上ぐる風、（爾雅）暴風從下上、曰三一一。

〔希有鳥〕（神異經）崑崙山有大鳥、名曰三希有、南向張左翼覆三東王公、右翼覆三西王母、背上小處無羽、一萬九千里、西王母歲登三翼上之三東王公也、（李白に

大鵬遇希有鳥賦あり、人の知るところ也。〔焚輪の風〕上より吹下す風、（爾雅）焚輪謂三之類（註）暴風從上下（劉禹錫詩）

迅與三一一俱。

意 戰亂の秋、勇士の奮ひ立つ状を敘したり。扶搖焚輪二語第一節に應ぜり。

第二十五節 百七十八頁

意 劫運の風の吹けば、勇士は大功を成すの機來れりとして笑みて起つならんとなり。

第二十六節 百七十九頁

〔箕星〕二十八宿（本章第五節、二十八宿の條參照）の中、東方に位する星にして風を主どるなり。（晋書天文志）箕四星亦後宮妃后之府、亦曰三天津、一曰三天雞、主三八風、凡日月在三箕東壁翼軫者、風起、（風俗通）箕星風伯也、飛廉風師也。〔飛廉〕又蜚廉と書す。（呂氏春秋）風師



曰一一(漢書武帝紀)元封二年作三甘泉  
通天臺長安蜚廉館、(註)蜚廉神禽能致  
風氣二者也。

〔蓬々〕(莊子)一一然起于南海而入  
于北海、折大木、蜚大屋、者惟我能也。

〔發々〕(詩經)冬日烈烈、飄風一一。

第二十七節 百七十九頁

〔翻〕羽節の義、羽の莖。

意 第二十六、第二十七節は、大風の吹  
く時、大鵬、希有鳥の如き大鳥は却つて  
之を悦びて、翔り遊ぶことなるが、勇  
るもの才あるものも亦然らん、國に事  
るの時は即ち奮ひ起つて各々其の人に勝  
るの能を發揮するの時ならんとなり。

第二十八節 百八十頁

〔小がら〕小がらめに同じ、山がら四十  
からと類を同らし、やまがらに似て小く、  
頭黒く、頸頬白くして圓紋の如し、背腹  
また白く、翅尾黒し、よく嘯り、身軽く  
して上下すること速なり。(山家集)なら  
びてともをはなれぬこからめのねぐら  
に頼むしひの下枝。

意 大風を悲しむ小雀の醜さが如く、時  
運を恐れて啣ち言するは無骨漢の卑しき  
振舞なりとなり。

第二十九節 百八十頁

意 風渡れば菫は小さきも香を送り、蘆は  
嫩きも涼しき音を出す。今の時に際して

我よく黙々たらんや、たとひ風をよるこ  
ふ大鳥の思ひはなきも、風を悲み厭ひて  
草に潜む小雀の卑き嘆きを厭ふとなり。

第三十節 百八十一頁

〔梶枕〕梶を枕にして舟中に寐るなり。

(千載、羈旅、俊成)浦つたふいそのとまや  
のかぢまくら聞きもならはぬ浪のおとか  
な。

〔火床船〕火床はもと木の箱の中に土を  
塗り作りたる窠を指していふなれど、轉  
じては舟の其窠を置くところ、即ち艫の  
間の次の間を指していふなり。

〔蓬萊〕神仙の住むところなり。(山海  
經)一一山、在南海中(註)上有三仙人、宮室

皆以金玉爲之、鳥獸盡白、望之如雲  
在二勃海中一也。

意 深山の菫々菜の小さきも香を送り、  
川蘆の嫩きも葉擦れ涼しき音を出す、切  
運の風の吹く時、我も王土に生ける民な  
れば仙境に思を寄するは我が欲するところ  
なれども、菫々菜に愧ぢ、若蘆に愧づ  
れば、我亦苦撥ねて立たうかやといふな  
り。

此章全體は、船の中の人の言として、悠  
然として平常水上に長閑に暮せる老人も  
國家事あるに際しては、國家の爲に力を  
盡さんとすと歌へるなり。



第五章 百八十三頁

第一節 百八十三頁

意 前章の歌を歌ひたる人の、其の舟の流れ去れるを、廬の窓より眺めやりたる長江の景色を敘したるなり。

第二節 百八十四頁

意 彼の舟何處より來しか、それも知れず、いづくへ去りしか其も知れずなりた

第六章 百八十五頁

意 我も彼の舟人の如く浮世は忘れられたれども、身は猶王土の臣なれば爲す事なくて過さんは羞かしければ、舟夫の苦撥ね

りとなり。

第三節 百八十四頁

意 彼の歌を歌へる人の船、出處も知れず去處も知れずなりたれば、今これを思ふに其事現かとおもへば夢の如く、其人他かと思へば自己の如しとなり。

退けて立たん時、我も我が庵を立ち出でなんか、彼の人の歌甚だしく、我が心を動かせりといへるなり。

第七章 百八十七頁

意 此章は一轉して、されど斯く思ひしは愚なりき、苦舟の人の歌を心にとめて

第八章 百八十八頁

第一節 百八十八頁

第二節 百八十九頁

第三節 百八十九頁

意 第一、二、三節は寒き冬の朝、花を造り得と誇れる姫に乞ひて山櫻を貰ひしが、實に其花は三月の盛りの姿美しかりきといへるなり。

第四節 百九十頁

出廬抄註

何すべき、我は我が庵に祭れる詩の神の聲を聞かば足らんのみと咏じたるなり。

〔まさなごと〕 まさなきことの義、即ち正しからざる義、いつはりの意なり。(源、紅葉賀、十八)みるめにあくはまさなきことぞよと。

第五節 百九十一頁

意 第四、第五節は、よく見れば花は眞の花ならぬ剪綵花にて、匂ひもおもひきもなき、見にくきものなりきといへ



るなり。

第六節 百九十二頁

意 我その日より、人の手の若花を造らば、必ず其は眞の花にあらざして、眞の花は決して造り得べきにあらざるを悟りたりと。

第七節 百九十二頁

意 此の章、第一節より第六節までは造

第九章 百九十三頁

第一節 百九十三頁

意 園の春浅き景色をいへる也。

第二節 百九十三頁

〔細齒杷〕 農具、柄長く、頭に齒あり、

り花の喩を設けて、第七節に至り其の本意を述べ、此の劫運の風の吹き荒む日に當り、國家の爲に一篇の詩を作らんとする意無きにはあらねど、人の手は終に花をなし得ず、それと同じく我が意よりは詩をばなし得ぬわけなりしなりと歌ひし也。

土塊を碎き、物を掻きあつめるなどするに用ゐるさらひの其の齒の細かきものなり。

〔如露〕 (續無名抄世話字盡) 如雨露とあ

り、銅、または鐵葉にて作り、水を送る管の末には細かき孔を數多く穿ち、雨露の如く噴き出づ、花壇等に水を注ぐ具なり。

意 戀も願望もなく園守のたゞ餘念無く雪消ゆる頃より花を培ふ狀を敘したり。

第三節 百九十四頁

〔醜草〕 見にくき草の義、(萬、十二ノ廿四) わすれ草かきもしみ、にうゑたれどしこのしこ草猶こひにけり。

〔庭蘿蔔〕 たゞ菜ともいふ、其の根甚だ長くして、庭除の雜草中最も除き去り難きもの也。

〔鷹の爪〕 形鷹の爪の如き小き草にして

出廬抄註

庭除に多し。

〔氣條蟲〕 木の氣條の中に潜み居て、氣條を喰ふ蟲。

〔根切蟲〕 地蟲に同じ、園圃の土中に生

ず、形もむしの如く、長さ一寸許、色白く首赤く尾黒し、草の根を食ひ、嫩苗

を切りて害をなす、春の後土中にて復蟄に化し、後羽化して蟬となる。又別に黒

色のものあり。意 園守の醜草を除き、害蟲を去りて花を養ふ其の辛苦の狀を敘したるなり。

第四節 百九十五頁

〔神靈〕 神代記に靈をよめり、奇日の義、奇異なること。



〔た、へまつりて〕 褒めて言ふ義。  
意 暖かき春の風吹けば、鳥も歌ひ胡蝶も舞ふとなり。

第五節 百九十六頁

意 春の神の恵みは何處の里にも行渡らざることなく、花を見んことを願ひたる園守には終に花を賜へりとなり。

第六節 百九十六頁

意 待ち戀れたる花の咲ふを見て、老いたる園守の顔にも笑の花咲けるとなり。

第七節 百九十七頁

第十章 百九十七頁

第一節 百九十七頁

九〇  
意 園守の自然の花を待つらんやう、我も自からなり出でん詩をおもひて、我廬に在す神の御聲を聞かんとなり。  
此の章、前章を打翻して、第一節より第六節まで、眞の花を養ふ園守の事を敘し、第七節に至りて、詩は猶花のたゞ待つべくして造るべからざるが如し、我たゞ其の成り出づるを待たんのみ、強ひてこれこれの詩を造らんとは思はざらんと云へるなり。

〔さすらひて〕 流離、寄邊なくしてさま

よふ義。(新後、羈旅、) さすらふる心に身をもまかせずば清見が關の月をみましや。

第二節 百九十八頁

〔鼓子花〕 到る處の野原に多く、塵塚などにも咲くなり。春舊根より生じ、夏、花を開く、午前に吹きて夕に萎む、貌朝顔に似たり。さして人の賞美せぬ花なるを、特に取り出して、花ならば色薄くとも猶愛すべしといへるなり。

〔乞丐兒の夢に這ひかゝる〕 乞丐兒の野邊に寝たる其の顔の近くに鼓子花の咲けるを言へるなり。  
はふらしし 投げやり、打ち捨つる義。

出廬抄註

(源、明石、初) かくながら身をはふらかしつるにやと心ぼそう覺せど、(六帖、四) 身はすてつ心をだにもはふらさじつひにはいかゞなるとしるべく。

〔柱立〕 新に家を建つるに、先づ柱を立つること、切組むは切り組みをなすこと。

〔人のいされ〕 人の體より發せる熱氣の蒸す如く熱きもの、義。

〔ほめき〕 火炎の氣の扇られ立をいふ。  
意 鼓子花の如き色薄き花なりとも眞の花あらんには、身を苦めて廬外にも之を尋ねべけれども、世にはたゞ俗事のみありて、なつかしき花の無かるべければ、是非無しと歌ひしなり。花は詩にたとへ



たるなるべし。

第四節 二百頁

意 我が廬を出でんとおもひしは愚なり

第十一章 二百一頁

意 茶を味ひ、香を炷きて、靜に詩をおも

第十一章 二百一頁

第一節 二百二頁

意 里の小供の男女打交りて、廬の側に  
歌ひ遊べる狀を敍し、小供等の歌ふ歌を  
出すの地をなせり。

第二節 二百二頁

意 潮さし來れば濱の小石も濡るゝが如

き、我れ作花のいつはりの業を如何んぞ  
なさんやと歌ひて、言外に、強ひて偽り  
作る詩を、つくり花にたとへたり。

廬の幽なる夕暮の趣を敍したるなり。

く、國に事あれば心無き兒等も勇み立つ  
といひて、漸くに後の軍歌を出さんとす  
る也。

第三節 二〇三頁

第四節 二〇四頁

〔明星抱く云々〕 明星の光甚だ大きく

美はしく涼しげにて子等の頭上に照り渡  
れるを抱くといへるなり。

意 第三節は歌のさまをあらはし、第四  
節は若葉の陰、明星の下に子等の歌ひつ  
つ行くことをあらはせり。

第五節 二百四頁

第十三章 二百五頁

第一節 二百五頁

〔敏馬の神云々〕 俗にいふ船魂神の事な  
り。不見目の義也、みぬめの浦は津國  
にあり、後人訓し誤りてとしまよめる  
歌あり。萬葉集抄に風土記をひきて見ぬ  
めの神はもと能勢郡敏馬山にあり云々。

出廬抄註

〔徘徊り〕 たは發語、もとほるに同じ、  
めぐること、まはること。(萬、十八ノ七)  
をふのさきこぎたもとほりひねもすに見  
ともあくべきうらにあらなくに。  
意 また新に彼方に軍歌を兒童等の歌ひ  
出せりとなり。

祭神は即ち猿田彦大神なり。造船運漕の  
ことをも教へ玉ひしかば船玉の神ともい  
ふ。  
舟人のいふ語に舟魂進むといふことあり  
船神の降臨をいふ、其の音琳々  
として寶玉を打つが如しといふ、喜悅の



事ある前表なりとぞ。敏馬の神の魂勇む、  
は其の事を寄せて云へるにや。

〔船首〕 みおしともいふ、水押の義。船  
のへさきに出で、水を截る部分。古へは  
によしとも、ねうしとも云ひたり。

意 此章すべて兒童の歌へる軍歌なり。  
意明らかなり。

第二節 二百六頁

〔春は彌生の大潮の〕 一年の中にて春三  
月の大潮最も高し。

意 義理仁慈の旗押立て、穢れたる大陸  
を洗ひ清めんため、春の大潮の如く押寄  
せよとなり。

第三節 二百七頁

意 鷺は露國の旗印なれば、荒鷺は陰に  
露國を指していふにて、鶏の雛は鶏林即  
ち朝鮮を指したるなり。我が池の魚は、  
我が所有の地なり。意明らかなり。

第四節 二百八頁

〔天津御神の御意云々〕 正義は我に命ず  
るといふの義。

〔我が大君の御言葉云々〕 宣戰の詔勅下  
りたるをいふ。

第五節 二百九頁

意 意分明なり。

第六節 二百十頁

〔時〕 手向の義にて、境界線を意味す。

〔霞たばしる〕 (萬、廿、十一) 霜の上にあ

意 燕を假りて、勇士を歌ひたる也。

第十三節 二百十三頁

第十四節 二百十四頁

意 獅子を假りて勇士を歌へり。

第十五節 二百十四頁

第十六節 二百十四頁

〔戰場〕 仕場居の義にて、兩軍の相戦ふ  
場所を——といふ。しばるを踏えるとは  
敵を退けて其場に據り果することをいふ。  
元龜天正頃の武者言葉なり、甲陽軍鑑な  
どにはしばし見ゆ。

第十七節 二百十六頁

第十八節 二百十七頁

〔満を持す〕 (史記越王勾踐世家) 范蠡曰

られたばしりいやましにあればまゐるこむ  
年のをながく、(鎌倉右大臣)ものゝふの  
やなみつくるふこてのうへにあられたば  
しるなすのしの原。

意 迅雷の如く砲鳴り、霞の如く彈丸飛  
ぶ、勝敗の岐るゝは今なりと。

第七節 二百十一頁

意 大斧は我也、大木は彼也、意明らか  
なり。

第八節 二百十一頁

第九節 二百十二頁

第十節 二百十二頁

第十一節 二百十二頁

第十二節 二百十三頁



持<sup>レ</sup>滿者與<sup>レ</sup>天、定<sup>レ</sup>傾者與<sup>レ</sup>人、節<sup>レ</sup>事者以<sup>レ</sup>地、(韓詩外傳)子路曰敢問——有道乎、孔子曰持滿之道抑而損<sup>レ</sup>之。  
意 第十六、第十七、第十八節は戰鬪の勝ちたるを敍したるなり。

第十四章 二百十八頁

意 歌ひく<sup>レ</sup>て去る子等の影かくれて、天は全く暮れ、後には若葉の堤残れるの

第十五章 二百十九頁

〔月に興ずる云々〕 一つの猪口の酒飲むは、影、猪口にうつればなり。  
〔花見てあるく云々〕 日光の下にて、形、

第十九節 二百十七頁  
意 死屍亂れ、硝煙猶残りて戦後の光景の慘憺たる景趣を敍したり。軍歌は此にて終れり。

みなりとなり。

影に先だつ時は影を負ふなり、影、形の前にある時は、形を負ふなりと見なして一句あるなり。

〔稻妻の火の中に云々〕 稻妻の光あれば即ちこゝに形あり影あるべき故、手を取りあふ云々といへり。

第十六章 二百十九頁

第一節 二百十九頁

〔因果同士〕 免かれ難き宿縁ある同士の義。

〔鳴神〕 雷の義。(古、戀四)天の原ふみとどろかしたるかみもおもふなかをばさくるものかは。

意 前章に、廬に唯燈と人一人と残れるのみと歌ひ了りたれば、本章に先づ影を呼び起して、此には形影相離るべき仲

意 可愛ゆき兒等の勇める聲消えて、廬の中には我のみなりとなり。

ならぬをいへり。

第二節 二百二十一頁

〔白魚云々〕 古名、み。今また訛してにこひ、また別に、さい、若くは、まじか、ともいふ。淡水に産す、形鯉に似て、色白く、體圓く、頭稍小く、鱗細かく、鱗は黄赤を帯び、肉柔かにして味は鯉より劣る。句の意は、蝶蜂鯉白魚、同類相憐み相隨ふことをいへるなり。



意 影の頭垂れて物を思ふに托して、廬

第十七章 二百二十一頁

第一節 二百二十一頁

意 形影相語る。

第二節 二百二十二頁

意 影の形に向ひて言へるにて、里の童の歌に感じて物を思ふか、形、汝は物質にして、大地を結びて身を成せるゆゑに、地の震ふとき汝の心も震ふよとなり。地の震ふは國家戦鬪の危きに臨むをさして云ふ。此の章より漸く形と影との問答を

第十八章 二百二十三頁

第一節 二百二十三頁

意 此一章は影の形にいへる言葉にて、お、此の我は以下十數行、飽まで影の形に伴へる境界を云ひて、其の睦み深きを叙し、さて、さりながら、國に事ある時汝ひとり惱むぞわはれなると歌ひしなり。

第二節 二百二十五頁

第三節 二百二十六頁

意 第二、第三節は、童の歌に心動き、國土の縁にひかされて深き思ひに沈みゆく形を悲しむとなり。

第四節 二百二十七頁

〔南海の山〕 普陀落迦山を指す、此には小白花といふ。觀世音菩薩の遊舎あると

出廬抄註

の主人の物おもふことを云へり。

發す。形は此の身にたとへ、影は詩の想にたとへたるものなること云ふまでもなし。

第三節 二百二十三頁

意 形の影に對ひて言へるにて、影は汝は捕捉すべからざるもの、たい光明ありて即ち身を成せるものにて、もとより地に屬かねば、地は震へど汝は愁へず、愁ふる我をいたみおもふかとなり。

ころにして紫竹林あり。

〔白鸚鵡〕——正しくは白鸚哥といふべし、普陀落迦山にありて觀世音菩薩に仕ふ、紫竹林及び白鸚哥のことは西遊記などにも見えて古くより人の知るところなり。句の意は、菩薩に仕ふる禽なれば、禽の苦しきやうなることは有るまじけれども、猶其の禽にして主無からばいよいよ自在快活ならんと思ふとなり。  
〔金華の石室の霧に花さく〕（神仙傳）皇初平者丹溪人也、年十五家使牧羊、有道士、見其良謹、便將至金華山石室中、四十餘年不復念家、其兄初起入山尋索、歷年不得復見、市中有道士、問



之曰、吾有弟、名初平、因令牧羊、失之、四十餘年莫知死生所在、願道君爲占之、道士曰、金華山中有三牧羊兒、姓黃名初平、是卿弟非耶、初起聞之、卽隨道士去、遂得相見、悲喜語畢、問初平羊何在、曰、近在山東、初起往視之不見、但見白石而還、謂初平曰、山東無羊也、初平曰、羊在耳、但兄自不見之、初平與初起俱往、初平叱曰、羊起、於是白石皆變爲羊數萬頭、初起曰、弟獨得仙道如此、吾可學否、初平曰、惟好道便可得之、初起便棄妻子留住、就初平學、

第十九章 二百二十八頁

共服松脂茯苓、至五百歲、能坐在立亡、行於日中、無影而有童子之色、後乃俱還鄉里、諸親族死亡略盡、乃復還去、初平改字爲赤松子、初起改字爲魯班、句の意は金華山の羊は仙人に牧はるゝと故、世の常の牧兒などに牧はるゝよりは必ず幸多かるべけれども、羊の爲には其の初平仙人も無くて、おのが心のまゝに遊ばんこそ樂かるべけれどと思ふとなり。意 普陀落迦山の禽、金華山の羊によそへて、國土の恩に繋がるゝ形の、此の夕を樂しまざるを影の吊へるなり。

第一節 二百二十八頁

〔形骸〕 身體の義、身軀の轉かといふ。〔なり出て〕 生りて世に出づる義。生出、化生、貫之、下ノ廿四)かざせとも花咲くとやはたのまるゝみのなり出べきときしなれば。

〔蜻蛉〕 とんばうの古名。(倭名、十九、十六)蜻蛉一名胡蠶、和名加介呂布、(金葉、雜下、)いつをいつと思ひたゆみてかげろふのかげろふほどのよをすぐすらんと。意 此一章は形の影に對つて云へるにて第一、第二節は我は地の人なるも、汝は天より來れる身、光明の中になり出て、

心も身も輕き汝も、我がために物を思ひて歎き呉るゝかとなり。第二節 二百二十九頁 第三節 二百三十頁 意 地よりなり出てし我なれば、國土の縁に心引かれて思ひ惱むとなり。

第四節 二百三十頁 〔八束穗〕 八束は丈の長き義。一鬚、一劍、神代紀に「秋の垂穗八握穗莫々然」と見ゆ。(新古、賀、兼光)神代よりけふの爲とや——に長田の稻のしなびそめけん。〔垂穗〕 垂れたる稻の穗なり。意 我を小雀に比して、御代安らけき大君の恵みの露にめでたく實れる稻を食み



て、我は今日まで生命を保てるなれば、我が生命は云は、我が生命ならず、大君の惠の露の珠の光りなりとなり。

第五節 二百三十一頁

〔五十鈴川〕伊勢の國にあり、上流に天照皇大神を祀る。(新古、七、俊成) 神風や五十鈴の河の宮はしらく千世澄めとたてはじめけん。

意 我は神國の民と生れ五十鈴川の清き流れの末を汲みて、我が胸に湛ふれば、我が心は云は、我が心ならずして、神川の水の清さの恩徳なりとなり。

第六節 二百三十二頁

意 賤が門にもひるがへる日の御旗の影

に我は生立ちぬ。されば我血の中には日の御旗の靈のあた、かみ漲らふとなり。

第七節 二百三十三頁

〔敷島〕日本の枕詞

〔花美し〕くはしは美しく妙なる義。(允恭記) 花くはし櫻のめでことめでは早くはめですわがめづる子等。(萬、十一、十九) 花くはしあしがきごしにたゞ一目あひ見し子ゆゑ千たびなげきつ。〔婀娜つかで〕猶あだめかずしてといふが如し。

意 大和の國に生れ来て、いさぎよき櫻の花の香の我が骨に浸みたれば、我が骨には櫻の花の香もあらんとなり。第四、

第五、第六、第七節は、節々皆我と此の國との密貼緊接して離るべからざるを云へるなり。

第八節 二百三十五頁

〔頭顱〕倭名抄には腦を訓せり。(和名、

三、一) 惱「奈豆岐」頭中の髓腦也。

意 我が全身すべて此國の地より來れば我が心とは云ふもの、我が心もまた實は

第二十章 二百三十七頁

第一節 二百三十七頁

意 影の言葉なり。栗を食む栗蟲は栗色を帯び、雪の野に栖む兔は毛白く、物皆己がなり出づる本にそむかぬならひなれ

出廬抄註

我がものならずして、此の國のものなり、我が心は即ち地の心なりといへるなり。

第九節 二百三十六頁

意 幾節をこゝに總べて、我が心は地の心なり、然るに今地は震へり、我は地より生り出でたれば、國土の縁に心引かれて果敢なく悩むなり、影の如く自由不羈にはあり得ぬなり、と悲めるなり。

ば、汝は既に地の人たり、など國に事ある今日、國の爲め太刀執りて立たざるやと、影の形に對ひて云ひたるなり。

第二節 二百三十九頁

1011



意 形は影に對ひて、我も爾思はざるにはあらねど、我は汝と別れん、その悲みに惱むなりと云へるなり。暗に力を世に盡しなば詩の事に従ふ能はざるに至らんことを悲めるは云ふまでもなし。

第三節 二百四十頁

意 影の廳々として虚空に遊ぶ大自在なるが好ましといひて、暗に國家に事ある今、我は詩を思へども悠々として之を思ひ得ざるなりとて羨めるが中に、影を愛すること深きをあらはせり。

第四節 二百四十一頁

〔みづほの國〕 日本國の異稱。みづほは稻穂のみづくしく若く榮ゆるをいふ。

意 影と形と、うまれだち異れば思ひは差へど、心は一つにて互に離れ難し、されどたい如何にせん、此夕、影も形に従き得ず、形も影に伴なへず、地に居る身と、天飛ぶ身、相隔たりて一つになれざ

第二十一章 二百四十四頁

第一節 二百四十四頁

〔八重垣〕 八重山、八重むぐら、八重がすみ、八重ぐも、八重のしほぢなどいふ、八重は幾重もかさなる義。

〔御殿〕 家の敬語、日本紀に殿を訓せり、御在所なり、みありかともいふ、萬葉集に御在香と書けり。古事記に御舎とあり。

〔蘆芽〕 芦の芽なり。古事記に、阿斯訶備と見えれば、あしかびとよむべし。〔おのころじま〕 日本國の異名。日本紀に磯馭廬島と見え、古事記に淤能基呂と見えたり。

意 潮風に生ひたる蘆の根を移さるが如く、飽まで國を離れざる思ひもまた嘉すべしといひて、影の形を憐むが中に、また甚だ深く之を愛するおもひきをあらはせり。

第五節 二百四十二頁

意 影と形と、只離れんとして離れ難きを互に悩むと歌ひたるなり。

第六節 二百四十三頁

るが恨みなりと。一章の意は形影を假りて、廬の主人の、國家の大事にあひて、悠然として詩を樂む能はずして、二念に悩めるを云へるなり。

〔櫻の梢云々〕 日本國に吹きわたる風、即ち戰鬪の起れる事をいへり。

〔うれたみて〕 うれたしなり。憂甚しの義。(古事記、上ノ三十)にはつとりかけはなく宇禮多久母那久那留登理加。意 形を連れて大空の詩の神を訪れ遊ばんと影は思へど、汝は重き地の人なれば、



それもならず、汝は花の樹蔭に空しく思ひ沈めるよとなり。

第二節 二百四十五頁

〔徒坐〕 成なくして空しく居る義。

〔征矢〕 常に戦陣に用うる矢の稱、三羽に矧ぐ。倭名抄に征箭を訓せり、殺矢の義なるべし。(萬、二十の二十四)おひ曾箭

のそよとなるまでなげきつるかも。〔麻に交らふ蓬〕 蓬は直なり難きものなれども、直なる麻に交れば直に生ひ長つものなり。弱きものも勇士の間に交はれば、聊か力を致すを得るなり。

〔籠〕 かごなり。(赤染集)身はこゝに心

第二十二章

二百四十七頁

意 おのづから明らかかなり。形影如何と

第二十三章

二百四十八頁

第一節 二百四十八頁

第二節 二百四十八頁

〔空足搔〕 あがくは前足にて地を搔くこと——は馬進まずして空しく足搔するをいふ。(萬、十四ノ卅一)さわわりのてこにい行わひあが駒が足搔をはやみことゝはすきぬ。

意 駈け出でぬ馬、理に従はぬ女、皆我が二念に惱めるにたとへたるなり。

出廬抄註

はそらに飛鳥のこにこもりたる心地こそすれ。

〔垂尾〕 長く垂りたる尾。(萬葉、人丸)

あしびきの山鳥のをのしだりをのなかなかし夜をひとりかもねむ。

意 前の節に反して形は又影を伴うて、國に事ある日、勇士の間に挟まりて勵まんとすれど、汝は鳳凰の籠の中に在るを肯んぜざるが如く、我に従ふを欲せざれば、それも叶ひ難しと歎せるなり。

第三節 二百四十七頁

意 一章の意此節に明らかかなり。

もする能はざるを歎けるなり。

第三節 二百四十九頁

意 怯馬愚婦の勇者高士に捨てられしごとく、我も詩の神に見棄てられて久しく詩神の聲を聞かずとなり。

第四節 二百四十九頁

意 怯る、馬の如く空足搔する醜さに詩の神我を疎みしか、愚痴なる婦の如く理に就かざりし愚さに詩の神に見棄てられしかとなり。



第五節 二百五十頁

〔蠛蠓〕 古名、かつをむし、まくなぎ、蚊の類。亂れ飛びて人をして瞬ぎせしむればまくなぎといふ。(和名、十九ノ廿四) 蠛蠓「漢語抄云、加豆乎無之、」  
意 瘦馬の棄てられても猶主をおもふ趣きを叙したるなり。

第六節 二百五十一頁

意 棄てられし妻の猶男を思ふさまを敘したるなり。

第七節 二百五十二頁

〔驚馬〕 (玉篇) 最下馬也。  
意 驚馬、愚婦悲み泣けども勇者高士歸らず、我思へども仙車痕なく靈光眼に遺

るのみにて詩神の聲無しとなり。

第八節 二百五十三頁

〔芸窓〕 芸(説文) 草也似目宿(禮記註) 芸香草也、(續博物志) 典略云、芸香辟紙魚蠹。故藏書臺稱芸臺。——は書齋の窓なり。

意 我が廬の神、廬を見棄て、御聲も聞えず詩の影もさゝざるに至れりとなり。

第九節 二百五十四頁

〔馬柳〕 (和名、十五ノ四) 柳「與勢波之良」繫馬柱也、(宇治拾、二ノ七) かはらにゆきてよせはしらほりたて、身をはたらかさぬやうにはりつけて。  
〔驚馬〕 馬術の語。病癢にて進まざる馬

をいふ。與勢同、馬很也(史記秦本紀) 晋君棄其軍、與秦爭利、還而馬驚、(史記晋世家) 惠公馬驚不能行。又唐韻に「は馬の脚屈り重くなるとあり。陟利の反、致と同じ、俗に太利といひ、今諺に驚の付くと云ひて、物事の障滯することに云ふもこれによるとぞ、馬書には垂に作る。

第四編

第一章 二百五十七頁

第一節 二百五十七頁  
意 此一章若き人の歌にて、此節は先づ

出廬抄註

意 驚馬の捨てし主を思ふが如く、女心の忘れし郎を慕ふ如く、我詩の神を思へども、あら疎ましの我が身やな詩の神にも見棄てられぬとなり。此の章おのれを驚馬、愚婦に比して、廬の主人の二念のために詩神にすてらるゝに至りたるを悲めるなり。一篇の意、第二篇第一篇に對して頓挫せるなり。

若き人の自から負むところと自から期するところとを現はせり。



第二節 二百五十七頁

第三節 二百五十八頁

意 草間の蟲鳴を爲すもの、皆鐵鼓の響に魔ゆべしとにて、次の節につゞきて、愛國の歌の大なるを讃せるなり。

第四節 二百五十八頁

第五節 二百五十九頁

意 第四、第五節は、血をもつて成る愛國の歌には一世をおほふ意氣あり、生命あれば、此前には星よ堇よの蟋蟀の鳴をなす柔弱なる歌は羞ぢて逃ぐるとなり。

第六節 二百五十九頁

第七節 二百六十頁

意 如何に住き墨といへども、ただ墨を

もて紙上に文字をかきし歌は價値なしとなり。

第八節 二百六十頁

意 花を傷み、戀ひを詠む歌はやさしくとも、終に何の益にもならずとなり。

第九節 二百六十一頁

意 明らかなり。

第十節 二百六十一頁

〔拜む〕をれがむの轉、折り屈むこと、をがむに同じ。  
（恐みて仕へまつらむ、烏呂餓彌て仕へまつらむ、）

〔梁横へて〕（説文）矛也亦作稍、（通俗文）矛長丈八謂之梁、（蘇軾赤壁賦）舳艫

千里旌旗蔽空、醜酒臨江一賦詩。

意 此の章は、廬中の人とは大に異なりたる考を抱ける若き人ありて、其の人み

第二章 二百六十二頁

意 廬中の人、前の章に見えたる若き人の歌をきゝて、其の歌の御神を輕んずる

第三章 二百六十二頁

〔瑪瑙火に飽く〕 瑪瑙は火に逢ひて其の紅色を益すものなれば、——といひて、若き人の紅色に艶やかなる面を形容せるなり。

〔苛らぐ〕 苛をはたらかし、言葉。怒る、

づから其の思ひを述べたるおもむきを作れるなり。

を訝かり疎むまでにて意明らかなり。

かどだつ。

意 廬中の人、窓前の客の詩神を罵るをたしなめて、青春の意氣に誇るも聽て浮世に老いん時、我が如く詩の神の徳を知るらんと云へるなり。



第四章 二百六十四頁

第一節 二百六十四頁

〔進ぶ〕 愈進む義、(加茂保憲女集)春駒のすさむるよどのわかくさもつまにはしかぬものにぞありける。  
意 再び若き人の歌なり。浮世に老いん時、詩の徳を知らんといへるに應へて、我は永久に若き血を漉へて生きん、老いすさぶことあらざれば詩の神を何にせんとなり。

第二節 二百六十五頁

第三節 二百六十五頁

第四節 二百六十六頁

意 別に註せざるもおのづから明らかなり。

第五節 二百六十七頁

〔李太白〕 李杜と並び稱せられて、支那第一の詩聖なれば人の遍く知るところなり。(舊唐書文苑列傳)李白字太白、山東人、少有逸才、志氣宏放、飄然有超世之心、父爲任城尉、因家焉、少與魯中諸生、孔巢父、韓準、裴政、張叔明、陶沔等、隱於徂徠山、酣歌縱酒、時號竹溪六逸、天寶初客游會稽、與道士吳筠、隱於剡中、筠徵赴闕薦之於朝、與筠俱待詔翰

林、白既嗜酒、日與飲徒醉於酒肆、元宗度曲、欲造樂府新詞、亟召白、白已臥於酒肆矣、召人以水灑面即令乘筆、頃之成二十餘章、帝頗嘉之、以下略。

〔巴陵〕 洞庭を望み得る高き地。(水經注)巴丘山在湘水右岸、山有故城、本吳之巴丘邸閣城也、晉立縣于此、宋立一郡。

〔洞庭〕 (水經注) 一湖廣員五百餘里、日月若出沒於其中。

〔東籬の下〕 〔陶淵明飲酒二十首詩其五〕 結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、採菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此中有真

出廬抄註

意、欲辨已忘言、

〔淵明を嘲みしを〕 (李白、九日登巴陵) 置酒、望洞庭水軍詩)九日天氣清、登高無秋雲、造化闢川岳、了然楚漢分、長風鼓橫波、合沓蹙龍文、憶昔傳遊豫、樓船北橫汾、今茲討鯨鯢、旌旆何繽紛、白羽落酒樽、洞庭羅三軍、黃花不撥手、戰鼓遙相聞、劍舞轉頽陽、當時日停曛、酣歌激壯士、可以摧妖氛、握齧東籬下、淵明不足群。

意 李太白洞庭の水軍を望み戰鼓の音を聞きし日は、陶淵明を嘲みて、握齧東籬下、淵明不足群と云ひしならずや、沉んや此の眞の大戦の時に當つて、時世に

一一三



關せぬ歌や詩などにか、つらひ居るは思  
なりとなり。

第六節 二百六十七頁

第五章

二百六十八頁

〔山樵〕 山里に住む樵夫仙人など賤民の  
義。(拾、夏、是則)山がつと人はいへども

郭公まづ初聲はわれのみぞきく。

〔漁翁〕 (倭名、二ノ五) 漁父二云無良

岐美。(宇津保、吹上、下の廿二)むらぎみ

めしておほあみひかせなど。

〔鰯雲〕 鰯などの群る、如く點々相連な

りて空に瀾る雲をいふ。(狂歌)芝浦の漁

人も網をうち忘れ月には厭ふ——かな。

意 此の章すべて盧中の人の言に答へて  
若き人の、いたづらに詩歌に耽り、時世と  
關せざるの態をなすものを誘れるなり。

また野島流兵書にも見ゆ。

〔まろかせ〕 塊なり、金鐵の——などい

へり。

意 形の窓前の若き客に對つて答ふる言

葉にて、人おのく希望あり人各々心あ

りて心たがへば山樵と漁翁とは相反くな

らひなり、君は世を思うて頻りに歌を卑

しめど、我はひたすら歌を得んと思ひ惱

む。希望たかへば氣も合はず、これも浮

世の姿にて争ふともまた甲斐なければ、  
壯士よ、吾が盧の前を過ぎ去れとなり。  
前後數章の間、若き人は甚だしく詩を輕

第六章

二百七十一頁

意 此一章は影の言葉にて、此現世の醜  
の奴となりて、國の爲めとて空に騒ぐと  
も、さありては必らず歌は得成さじ、歌

第七章

二百七十三頁

第一節 二百七十三頁

〔水づくところ〕 水漬くに同じ、水に浸  
るところなり。

〔割葦鳥〕 よしどり、よしはらすめ、

出處抄註

んじ國を重んじ、影は又甚だしく詩を重  
んじ、形は其の中間にあるを見て取るべ  
し。

の御神を仰がぬ汝狂客は我が好まざる  
人なれば吾が盧前を去れ——となり。

ぎやうくし、皆同じ。夏、水邊の葦の  
中にゐて、莖の中の蟲を捕り食ふ、啼く  
聲殊に喧し。  
意 此一節はまた若き人の言にて、



小廬の人の胸せまくして我を怒るか、居るも去るも我が心の儘なり、など汝が指揮を待たんや、割葦鳥は川添の水づくところにあて、も宿れ、我見ては戀ふにも足らぬこの廬の邊りに立ちて何にかはせんとなり。

第二節 二百七十四頁

意 明らかなり。

第三節 二百七十四頁

〔蝸牛〕 かたつむり、でんでむし、まひくつぶり、皆同じ。

意 蝸牛の、蔦の葉にとまりて、おのが殻の中に籠り居て、我賢しと誇るが如くすとも、秋風吹かば其の葉も散り行くべし、おのれのみ小廬に籠りて潜むとも甲斐無し、誰か褒むるものあらんやとなり。

第四節 二百七十五頁

〔鴻鵠〕 日本紀には鶴を訓し、倭名抄に類を訓し、鳳凰をもおほとりといへど、今茲にいふものは單に大いなる鳥の義。〔必ず森の第一云々〕 百舌鳥の性、必ず最も高き枝に止まるものなり。

第五節 二百七十六頁

意 好し鴻鵠の志はなくとも、せめては高き梢に棲まる百舌鳥にも慚ぢて高き心を有てよ廬の主となり。

第六節 二百七十七頁

〔のらもの〕 懶惰漢の義。

〔阿含經〕 有龜被野干所包、一而不出、野干怒而捨去、佛告諸比丘當如龜一、自一、根一、魔不得便、(注)野干獸名、干音狂、龜首尾及四足凡六。

〔しどろもどろ〕 甚だしく打ちみだれたる義、しどろを強めて云ひたる言葉なり。

〔六帖、六ノ上〕 まめなれどよき名もた、ずかるかやのいざみだれなん——に。

意 龜の醜き智慧假りてたゞ事無きを願ひ、世を忘れて吟哦に耽り、白紙を汚し、頭上の髪黒きを使ひ盡して世に遺す、それが何ぞやと嘲りたるなり。

第六節 二百七十七頁

〔のらもの〕 懶惰漢の義。

出廬抄註

〔夢の骸骨〕 夢に骸骨あるべき理は無けれど、歌は猶の如しといへるなり。

第七節 二百七十八頁

意 歌とは何ぞ、赤白の肉の解け失せて骨の残るが如く、悲喜の夢消えて、それを歌ひし歌の残るなれば、歌とは夢の骸骨なるのみとなり。

第八節 二百七十九頁

意 人世惜むに足らず意氣重んずべきを云へる也。

意 花は一時、人は一代、婦女は世に愛されよ、男兒は敢て國を愛せよ、物おのおの其の性に負くなかれとなり。



第九節 二百八十頁

意 かるがゆゑに男兒と生れたる身なれば、我はたゞ愛國の一念を有ちて、而して此の崇高の念のあるためばかりに男の男らしく尊き事を知るとなり。

第十節 二百八十一頁

第八章 二百八十二頁

〔むしの嫌ふ〕 何となく自然に我が性の嫌ふをいふ。

〔追分〕 路の左右に分るゝ點をいふ。

〔有りのすさび〕 有りて進ぶるに任する義、(六帖、五ノ十)あるときはありのすさみにかたらはでこひしきものとわかれて

意 吾が脚は吾が路を行くべし、汝は小齋の中に睡れ、我は長堤の蔭に去りなるとなり。

此の章すべて、時世に關せずして悠々たる詩人を斥けたる若き人の言なり。

ぞしる。

意 蟲の嫌ひし道連も分れて後には淋しく思ひ、つらかりし窓前の客も去りて後は懐しく思ひつゝ、盧音なく更け行く狀を敍したり。

第九章 二百八十二頁

第一節 二百八十二頁

意 此の章はまた前の若き人とは別の人の言にて、第四節までは皆自から嘲けり興じたる語なり。小夜ふけて魚も禽も睡れるを、たゞ多感なる詩人のみ眠らずとなり。

第二節 二百八十二頁

意 前節にほとゝ同じ。

第三節 二百八十三頁

〔短檠〕 ともしびなり。借作燈、檠字檠架也、韓愈有「一歌」(蘇軾詩)免使韓公悲世事、白頭還對一燈。

出廬抄註

意 夜更けて夢路に入らず、短檠の下に句を練れば荒れ鼠は人を侮りて駆け走るとなり。

第四節 二百八十四頁

〔むかしの粹〕 西鶴を指して云ひたるなり。(西鶴五百韻の序)上略、時に花は盛り、山は彌生の六日七日八日に、すらりと此五百韻、千秋樂には座を立ち、萬歳樂には提灯、釣鐘、夜更けて歸るは俳諧師ぞかし。

意 更けて歸るは俳諧師ぞと云ひしが、我も夕暮出でし詩の友をたづねて闇に迷



へりとなり。

第五節 二百八十五頁

意 此に廬あり廬に人ありて、柳も眠り水も寐し中にたゞ一人覺めたるは詩をおもへるにやとなり。

第十章 二百八十六頁

第一節 二百八十六頁

意 廬の人、外の人に問ひかけられて、

第二節 二百八十六頁

第十一章 二百八十七頁

意 此一章は客の言葉にて、廬に一物なきが面白し、詩は貧を招び、貧は詩を招

第六節 二百八十五頁

意 萬物睡りたる中に貴卿一人覺めたるは、戀に悶へたるか、若くは我が如く詩を思へるにやと問ひたるなり。

外の人また詩を思ふ人なりと聞き知り、酒盞の酒を得たるが如しと悦びて之を迎へ入れたるなり。

ふ、こゝにして半盞の茶に詩を語ることに興のあらん、我に酒無くして唯詩あり、

然るを酒盞酒にあへりとはをかしき戲言

第十一章 二百八十八頁

第一節 二百八十八頁

〔外の言葉は云々〕 否々、言葉は戯れのこと如くなれど言は戯れにはあらずとなり。〔琥珀かゞやく〕 良き酒の色を形容したるなり。(李白)蘭陵美酒鬱金香、玉碗盛來琥珀光、但使主人能醉客、不知何處是他郷。

〔七十粒の美稻〕 うましねは、美き稻なり、酒一滴は米七十粒より成るといへること、古來よりの傳説なり。〔醸み〕 醸すなり。(萬、四ノ廿五)君が

出廬抄註

れなりといへるなり。

ためかみしまち酒やすのゝに獨やのまん友なしにして。

〔玉盃〕 水を盛る器の名、(和名、十六ノ十二)盃「俗云毛比」(武烈紀)椀摩暮比爾水さへもり云々。

意 此一章は主人の言にて、酒の一滴は七十粒の米の美膏を搾りて醸すものなれば、琥珀かゞやく醇酒は其一滴も惜むべく、砂の上にそゞべからず必らず玉盃に盛れとなり。

第二節 二百八十九頁



意 詩を酒に喩へたるにて、米の膏は即ち酒となり、心の膏は詩となるなり、詩を受け聞きて知る人は即ち玉盃の如く、詩を何人に示すことも無くて終り、または僮夫野人に示すは、酒を砂上にそぐが如しとなり。

第三節 二百九十頁

意 我に一樽の酒ありし日は注ぐべき盃を得んとし、一篇の歌ありし夜は聞かさん友もがたと窃に思ひたりしが、今詩を戀ふれど詩を得ずして悶ゆる我、君に示さん詩はなきも、君が詩を空しく地に注

第十三章 二百九十二頁

ぐ酒の如くにはさせじとなり。

第四節 二百九十一頁

〔深草〕——は京都の郊外にして、古くより土器を出せる地なり。  
〔土器〕かはらけなり、土焼の釉を掛けざるもの、稱。

意 さあれ、君が酒はよかるべけれど、我が酒盃は黄金にあらざ玉にあらざ、土器にて見る目陋しく悲しく、我は果敢無き身分のものなれど、君幸ひに厭はざれとなり。

第一節 二百九十二頁

〔薄きも無きに勝れり〕薄々の酒も無きに勝れりとは蘇東坡の語なり。

意 此一章は客の言葉なり。實に歌は酒ぞかし、たゞ我酒の淡くして人を酔はすに足らず、君が酒厄美しき盛意に相應ふ色香無く、無きに勝れりと昔の人は云ひたれど、我が酒は無きにも劣れりと謙退せるなり。

第二節 二百九十三頁

〔蛇葡萄〕えびづるの一種、葉の形相似て薄く、毛なし、實大きく秋に至りて熟す、碧紫紅白などの數色雜りて美しく、枯たるときは皆黒し。

〔猿丸〕猿といふに同じ、(宇治拾、十ノ六)さらぬだに——と犬とはかたきなるに。

〔猿酒〕猿の甘酒ともいひ、奥州南部邊にありといふ。猿ども木の虚などへ、木の實を入れて製し、貯へ置けるを、人見付けてこれをとると云ふ。

〔雨水入りて〕酒に水入りて時を経たるは味變じて酸く不味くなるものなり。

〔おもふせ〕耻かしく思ふこと、面目なきこと。おもてぶせに同じ。(源、蓬生、七)おのれをばおとしめ玉ひておもてぶせにおぼしたりしかば。  
意 第一節につゞきて是も謙遜の意を述



べたり。

第三節 二百九十四頁

意 面白き歌とよき酒とは人をして快よからしむれど、拙き歌と酸き酒とは人をして鬱鬱せしむとなり。謙遜の意なり。

第四節 二百九十四頁

〔壽相福相〕——、——、厚相、清相等は皆相法の語なり。

〔五岳四瀆〕 人相に高き所を五岳と云ひ低き所を四瀆といふ。一の語は柳莊相法等に出て居れり。五岳とは、額を南岳衡山といひ、左額を東岳泰山と云ひ、右額を西岳華山といひ、額を北岳恒山といひ、鼻を中岳嵩山といふ。四瀆とは耳を

江瀆といひ、眼を河瀆といひ、鼻を濟瀆といひ、口を淮瀆といふ。初版に六府とあるは、天倉を上二府といひ、額部を中二府といひ、頤部を下二府といふ。猶師に問ふ、新聞には四瀆とあり、初版には六府とありしが、今又四瀆と改められしは如何と。師曰く、五岳に對しては四瀆といはん方よろしく、六府と云はんとすれば三停六府といふべし、故に岳瀆と強き音の續くを厭はしく思ひたれど是非なく更に四瀆としたるなりと。

〔春色秋氣〕 春色は福相を云ひ、秋色は愁多き相をいふ。

意 君はさらぬだに多感の詩人なるに更

に惡詩の贈物して君が面をひそましめんやとなり。

第五節 二百九十五頁

〔汗血の駒〕 (漢書武帝紀)太初四年春貳師將軍廣利斬大宛王首、獲一馬來作西極天馬之歌(注)應劭曰、大宛舊有天馬種、踢石一、汗從前肩膊出如血、號一日千里、(杜甫醉歌行)驪驪作駒已一。意 美人には玉の簪、武夫には汗馬を贈るべきに、詩を好む君に贈るべき詩無きを悲しむとなり。

第六節 二百九十五頁

〔被を共にして云々〕 (杜甫、與李白同

尋范十隱居詩。李侯有佳句。往々似陰鏗。余亦東蒙客。憐君如弟兄。醉眠秋共被。携手日同行。更想幽期處。還尋北郭生。入門高興發。侍立小童清。落景聞寒杵。屯雲對古城。

意 若き友ありて、そはかりそめの言葉も皆歌となりぬべきほどのものなるが、其の友我と此處に來たらば樂からんを、手を携へて今日しも出でしが川邊の蘆の葉がくれに相失ひたるが故に、君の盛意に酬ふ能はざるを憾むとなり。

第七節 二百九十六頁

〔維摩の女月上〕 方等部佛說月上女經二卷あり、細には擧げ難ければ大意を記



せんに、毗耶離國、毗摩羅詰の女、月上端正無比なりしかば、王公華胄大厦豪姓の子弟等月上を得んとして相争ひ、遂に毗摩羅詰を脅して意を遂げんと欲するに至る。然るに、佛神力故於其右手一忽然有二蓮華、自出、黃金爲莖、白銀爲葉、琉璃爲藥、馬瑙爲臺、其華合有一百千葉、光明晬々、妙麗精華、華內有一如來形像、結跏趺坐、身如金色、自然顯現、威光赫奕、明照彼樓、備三十二丈夫之相、八十種好、莊嚴其身、彼如來像、出處光明亦復遍照三月上家內、中略、爾時月上、見如是等妙勝神通、歡喜踊躍遍滿其體、不能自勝、其女右手所執蓮華、遂捉投擲

如來身上、其華到已在於佛頂、成一花帳、其帳方整下有四柱、縱廣正等如依繩墨帳中、自然化出一座、衆寶莊嚴無量天衣以覆座上、其座爾時忽復有一化佛形像如釋迦者、坐彼座上、結加趺座、分明顯著、而月上女、擲彼華時作是願言、世尊願我藉此善根因緣力故、於未來世若諸衆生住我相者爲說其法令除我相、爾時彼女以佛神力、忽然復有第二蓮華、現其右手、彼女於是復以三其華、擲向如來、其華至已在如來上爲第二帳、衆寶莊嚴如上所說、於時彼女復言、世尊願我藉此善根因緣、於未來世若有衆生住我見者、爲說其法得除我見、爾時彼女以佛神力、忽然

復有第三蓮華、現其右手、下略。斯の如くして幾度投しても、蓮花生ずるといふ故事あるなり。  
意 維摩の女月上女が手に蓮花の咲きに咲くが如く、天才ある人の胸よりは歌の

溢れ溢るなり。彼だにあらば、直に此處に詩あらんを惜むべしとなり。  
此の章すべて、客の詩人の自ら謙遜して、友の若き人を讚へ進むるなり。

第十四章 二百九十七頁

第一節 二百九十七頁

意 曩に男兒歌はず蝶鳥の情、野客猶知る君王の恩といへる一聯の句を誦じて、意氣に誇れる若俊の此處を過りしが、君が友といへるは其の人か、其人ならば我

れ其人と語りたりと主人の云へるなり。

第二節 二百九十八頁

意 そは吾が友に疑ひなし、何故に君、彼を止めざりしかと客の言へるなり。

第十五章 二百九十八頁



意 此一章はまた主人の言にて、我は詩を思ひ、彼は世をおもひ、山樵と漁翁との希望たかひ業たがひ、氣も心も合はず、

第十六章 三百頁

第一節 三百頁

〔鵝毛〕 或は月毛に作る、赭白の馬也。

〔雲雀毛〕 雲雀毛は爾雅に謂ふところの驥にして背脊の毛黄なる馬をいふ。

〔栗毛〕 鹿毛より黒し、唐韻に諭は紫馬也、紫馬は栗毛なり、縵栗毛、尉栗毛、姫栗毛、柑子栗毛、紅梅栗毛等あり。

〔驪〕 毛詩の註に赤身黒鬣を驪といふ、驪聊に作る。同漢語抄に驪馬鹿毛なり。

彼の人鐵と剛く、我また石と堅意地なれば相和せずして西と東に立別れたりとなり。

〔驪〕 毛詩の註に驪馬は純黒の馬なり。

〔毛嫌ひ〕 或毛色の馬は或毛色の馬を嫌ふことあり、これを毛嫌ひといふ、毛嫌ひするものは相和せざるものなり。

〔火性、金性〕 丙丁の歳に生れし人を火性。甲乙に生れし人を木性。庚辛に生れしを金性。壬癸に生れしを水性。戊己に生れしを土性といふ。五行の相生を合性といひ相剋を合はぬ性といふ。

意 現世は土なり、此の現世の土に生ひいづる花のいろ／＼を歌ともいひ詩ともいふ、されば詩と異なる世あることなしとなり。

意 此一章は客の言にて、聞えざることを聞くものかな、馬と馬とは毛嫌もすれ、人と人とは性も合はざれ、詩と世と何の背くことあらんやとなり。

第二節 三百一頁

意 詩は鏡なり、鏡の中に影像はさまざまなるが即ち現世の眞實ならずや、されば世を外にして詩あることなしとなり。

第三節 三百一頁

第十七章 三百二頁

第一節 三百二頁

〔脇師〕 能狂言などに仕手の相手を演ずるものを——といふ。

意 主の言。弓絃は弓の隸僕なれど弓に倣はず直に世を経、的は射る箭の爲の脇師なれど箭に諂ひて動かず、我は客を敬



ふ心深きも、我をあざむく心なければ悲しけれども君が言葉を戻かん、我は然思はずとなり。

第二節 三百三頁

意 我は世を疎み捨て、たゞ詩をおもふのみ、時運、世態の鏡に映れる影を何愛でんや、見ても甲斐なくおろかしきとなり。

第三節 三百四頁

〔娑婆〕 梵語、忍界、忍土など譯す。衆生の三毒諸煩惱を忍受するが故にいふとぞ。又佛經に、三千大千國土の總名、即

第十八章 三百五頁

ち現世をいふ。

〔雲螭〕 みづち（説文）若龍而黃、北方謂之地螭、或曰無角曰螭。（李白詩）吾當乘三——。

〔晴けたき〕 晴したき意、（源、螢、三）おもふことをもかたはしはるけ侍らん。

意 茶はたゞ腥羶氣のなきがよく、詩はたゞ世の臭味の無きがよし、されば我は詩をおもうて世をばおもはずとなり。

主人は世を厭ひて詩を思ふ故に、客の言を戻きて其の信ずるところを述べたるなり。

第一節 三百六頁

意 此一章客の言、意明らかかなり。

第二節 三百六頁

意 淵瀬の變に身はあづからず、生れのみ、に過ぐす小石を君は學ぶかとなり。

第三節 三百七頁

意 小川の底の小石のやうにては餘りに世にそむき過ぎて、餘り小さからずやとなり。

第四節 三百八頁

意 世を厭ふ人、愛づる人いろ／＼あれど、世は人々を容れて餘りあり。花薫り嵐吹き、世はさまざま／＼なれど詩は世を容れて餘りありとなり。

出廬抄註

第五節 三百八頁

〔十字星〕 北半球に於ける北極星の如く、南極に於ける極星なり。また壽星とも老人星ともいふ。四星相つらなりて其形十字の如く見ゆるを以てクロツスの名あるなり。

〔軸の子星〕 北極星なり。

〔蒼穹〕 大空なり。（高適詩）高蹤激三類

波、逸翻馳三——。

〔壽星〕 南極壽星をいふ、（爾雅）に——角亢也とあるとは異なり。

〔辰星〕 北辰なり、（漢書李尋傳）——主三

正四時、當效于四仲。意 宇宙の限りなく際涯無く廣く濶けれ



ど、詩聖の歌に入る時は僅に詩卷の二頁なりとて、詩の大なるをいへり。

第六節 三百九頁

〔エデンの園〕 世始めて成りし時人類の居たる園。(新約全書創世記)エホバ神エデンの東の方に園を設けて其造りし人を其處に置き玉へり、エホバ神觀るに美しく食ふに善き各種の樹を土地より生ぜしめ、又園の中に生命の樹及び善惡を知るの樹を生ぜしめ給へり。

〔アヅアの時〕 有機體物の形跡なき以前の世の稱。

意 印度埃及の史は古くして明かならずエデンの園、アヅアの時も遙けく、時は

悠久にして遠く遠けれど、古今を須臾に寫し取ることは筆の穂先の露の間のことなりとて、これも詩の大なるを云へり。

第七節 三百十頁

〔三世〕 佛經の説に、過去、現在、未來の三つの世の稱。

〔十方〕 四方と、四隅と、上下との稱——世界。

意 詩は天地を罩め、日月を呑み、三世に互り十方を兼ねて大いなりといひしなり。

第八節 三百十一頁

意 街衢は廣くして花散る時は花を飛ばしめ、塵舞ふ時は塵颺らしむと也。

第九節 三百十一頁

〔海鷗〕 はまねこは海鷗なり、鳴く聲猫に似たるをもて濱猫の名あるなり。又沖猫ともいふ、義同じ。

意 海のゆたかにして心せまらざるを云ひたるなり。

第十節 三百十二頁

意 五彩まじつて錦は成り、或は若葉し或は落葉して樹は育つなり。世に種々の状態あるもまた宜からずや。街衢は廣く、海はゆたかなれど、詩は猶それより大いなりと云ひしなり。

第十一節 三百十二頁

〔あだむ〕 新撰字鏡に快を訓せり、平家

物語に、一門にあだまれてと見えたり惡まる、意なり。

意 世を詩の嫌ふことも無く、詩は世を容れて餘りあり、君詩を思ひながらに世を厭ふ所以無し、世は詩の神の掌中の珠なりとなり。

第十二節 三百十三頁

〔浮脂のごと國若き日〕 我國開關の初めなり、(古事記)國稚く、浮脂の如くして海月なすた、よへるの時云々。其の頃の宇麻志阿志訶備比古遲神、天之常立神、皆獨り成れる神也。

意 世に獨り成るものなく、葉は秋に落ち、花は春咲き、霜は朝の冷に結ばり、



氷は夜の風を得て凝り、詩は世運に醸されて成ると也。

第十三節 三百十五頁

意 浮世をうとみても人は浮世を離れ得ざるごと、猶魚の躍つて水を出で、も忽ち水に入るが如し。世を離れ得ぬ人の作るところの詩は即ち世運に醸されて成りて皆浮世のすがた宿らん、換言すれば浮世の相即ち詩なりとなり。

第十四節 三百十六頁

〔春光九十〕 三ヶ月九十日間の春の義也。  
意 月も花も、風も雲も、鶯の聲、燕の舞ひも皆歌なり。造物我に贈るに取れど

も盡きぬ歌を以てす、たゞ其儘に寫し取りなばめでたき歌は成るべしとなり。

第十五節 三百十八頁

意 風船買つて兒に持たせて親子の笑む中にも、鎮守の社に吾が兒の無事を祈るにも、妻が夫を戰場に送る涙の中にも、歌あり。太平の世、戦ひの世も歌なり。戀ひも罪も歌なり。勇士の怒、仁者の憂も歌なり。熱涙、熱血、愛國の意氣、懐郷の念、皆悉く歌なりと云ひしなり。

第十六節 三百二十二頁

意 水を離れて住む魚もなく。世を遁れ得る人もあらぬば、春は花に浮かれて酔ふもよく、秋は月に嘯き行くもよからん。

浮世の姿はたゞ其儘に詩なり。詩は世よりこそ成りもすべきを、君は詩をば思ひながらに、など世をば厭ひ棄つるやと也。

第十七節 三百二十三頁

意 世を厭ひて厭ひ果つる世ならば、世を厭ひても有りぬべきを、如何に厭ふとも到底遁れ得ぬ世に、浮世くと啣ちご

第十九章 三百二十四頁

第一節 三百二十四頁

〔金罍〕 金の罍なり(杜詩)金罍刮二眼膜(山谷詩)金篋刮レ膜(書言故事)作金篋、曰、武帝患レ目、金篋刮レ之、(涅槃經)如來生品、如下盲人爲レ治レ目故、造詣良醫上

出處抄註

とするもよしなき線言なり。詩にあてがれ、世を厭ひて獨り庵に君籠るとも國に事ある時、君の心の獨り安からんやと云ひたるなり。この節の末の句に至りて、主人の思想の過誤あるを道破せるなるべし。

是時良醫即以三金罍二抉二其眼膜、又荆谿湛然師に金剛罍釋文三卷あり。又義範に金碑論消毒二卷あり、有名なる著述にして人の知る所也。罍は篋に通じて病のあるところに觸れて病を去る器なり。句意は



涅槃經によりて解くべし、客の一句、我が病の在るところに觸れて我をして痛苦を感ぜしめたるをいへるなり。

意 此一章は主の言 金錚觸れぬ病眼の膜とは、金の錚の病眼の膜に觸れしが如く、客の言葉の主人の急所に當りしを言ひしにて、實に君の言の如く、國に事ある時、心迷ひ煩ひて、詩を思へども思ひ得ず惱み苦しみて我が心安きことなしとなり。

第二節 三百二十五頁

〔ほりかねの井〕 武藏野の井の名。(千載集、俊成)むさしの、ほりかねの井もあるものをうれしく水のちかづきにける。

〔苦清水〕 大和の吉野にあり。(西行法師)淺くともよしや又汲む人もあらし我にこと足る山の井の水。

意 痛き君が言葉に今我悟り得たり。我は野中の深き井より真清水を得んと願ふが如く、我が心の中より詩を得んと願ひ、君は到るところの水あるところより水を得んとするが如く、人の世それへのすがたの中より詩を掬べよと示すなるを悟り得たりとなり。

第三節 三百二十七頁

〔土用早〕 小暑の後十三日より立秋に至るまでの間の早を——といふ。意 掘井の水も、泉の水も等しく水は水

ながら、我は井の水の涸れ果てしが如く、世の騒がしき今日に遇ひては小さき心の驚きて、詩を得惱みて苦しみしなりと。

第四節 三百二十八頁

〔耆婆〕 天竺——大士は出胎の時針筒藥囊を持ちて生れ出づ、詳しくは耆婆因縁經に見ゆ、古印度の名醫なり。

〔野もせに〕 野も狭くなるまで。

〔人の七情〕 喜、怒、哀、樂、愛、憎、欲、をとなす。

意 歌はいと大いなり。造物は人に贈るに取れども盡さぬ歌を以てす。耆婆の眼に映る時野もせに茂げる千草八千草の藥

ならざるは無からん如く、詩人の眼に浮世のすがた映る時、詩ならぬものも少かるべしとなり。

第五節 三百三十頁

意 太平の世は笑みて歌ひて、戦ひの日は戦ひの日の姿を歌になさん。實在も歌、空想も歌、小さき廬何かせん、天地いづくにか歌の御神のおはさぬところあるべきとなり。

此の章客の言に啓發されて、水は到るところに在り、詩は我が心の中のみ成り出でざるを知りて、廬の主人の籠り居を敢てせざるに至れるをいへる也。



第二十章

三百三十一頁

意 廬の主人自ら喩ふるに小さき鳥をも  
つてし、其の聲の小さく歌遊るとも、長  
き夜の夢覺めれば、いで是より羽ふし  
を鳴らし飛び立ちて、廣き野を翔り、花


の色香を尋ねて、歌ひくして神にむくは  
ん。吾が廬を出て、世相を歌ひて詩神の  
恩恵に報はんとなり。

出廬抄註

終

明治三十八年十月六日印刷  
明治三十八年十月九日發行

定價金參拾五錢

著者 神谷徳太郎 

發行者 和田む先  
東京市日本橋區通り四丁目角

印刷者 中野鉄太郎  
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

發行所 春陽堂  
東京市日本橋區通り四丁目角  
(電話本局五十一番)

印刷所 帝國印刷株式會社  
東京市京橋區築地三丁目十五番地  
(電話本局千〇七十九番)



